

寸會つても、あゝこの人はよい人だとの印象を深く刻するものである。だから、若い人で、美容の人は、その外形の美のみに自負せず、この言行を端麗にして、眞に完全の美を發揮して貰ひたいものである。一切の悪點缺點と云ものは、斯道に自分ば馴れてるよと云風をして斯道の巧者然と構へ、得意がった様子をして、他人を蔑視すると云所から發生するのである。

【評】 前段の言ひつゞきである。若い人の長所短所は特に人の目につく、と云ことを言つたのに、續けて、極めて親切な調子で、決して叱りつけるやうな態度で無く、教へたのである。

「謙遜」まことに此事が出来れば、人間の極上である。私は、舊道徳があまりに謙遜を強ひるやうなのを、口惜しく思つて、自信自重とのみ、人にも云ひ、己れもさうした。しかし近頃になつて、恰度、自由講座で、全實在の話をする前頃から、つくづく「謙遜」で無くてはならぬ、と氣づいた。さうして、其の修養に努めて居る。なか／＼出来ぬことだ、むつかしいことだ、とつくづく思つて居る。斯く書く今日も、まだ／＼十分にこれが私には出来ぬ。中澤臨川氏、平田禿木氏、上眞行氏、かう云先輩に會ふ毎に、これらの諸氏の、まことに謙遜な態度に、つくづく恐入る。

謙遜、恭敬、これには「人を分かす」で無くてはならぬ。これで無くては本物では無いのである。「かたちよき人の」の次が、「ことうるはしきは」となつて本がある。その方では「言うるはしきは」と解するより仕方が無い。しかし、こんな拙い無理な言ひ方は無い。これは

「ことに若く」の「こと」が、どうかして重寫されたのであるに違無い。「こと」の無き一本の方が無論よい。それに従ふ。

第二百三十四段

「知らずしもあらじ」あの人、この事をしらないのぢや無からう。「さだか」判然。「うら／＼かに」鮮明に。「人は問ふ方の人を指す。」「問ひにやる」この「やる」忽ち問者の方の位置になつて書きたるなり。「心づきなけれ」厭なことだ。第三者から云なり。「あたり」界、と云ほどの事。或位置の人にはこの事は聞えぬ、などの事あるを云。「かやうの事は」判然した答をせぬ事を指す。

人の、物を問ひたるに、知らずしもあらじ、ありの儘に云はむは、をこがましとにや、心惑はすやうに返事したる、よからぬ事なり。知りたる事も、なほさだかにと思ひてや問ふらむ。又、まことに知らぬ人も、などか無からむ。うら／＼かに云ひ聞かせたらむは、おとなしく聞えなまし。人は未だ聞き及ばぬ事を、我が知りたる儘に、「さても其人の事のおさましさ」などばかり、云ひやりたれば、如何なることのあるにかと、おし返し問ひやるこそ、心づきなけれ。世にふりぬることをも、自ら聞き洩らすあたりもあれば、覺束なからぬやうに告げやりたらむ、悪しかるべき事かは、かやうの事は、物馴れぬ人の有る事なり。

【譯】 人が、或事を問うた時に、その問ひを受けた人が、なに、あの人がこの事を知らない

第二百三十四段

のぢや無からう、なにか此方を試みるのだらう、有りの儘に答へるのは、問が抜けてる、でも思つて、わざと、むかうが判然わからぬやうな風の返事をしてやる、と云ことがある。これは宜くない事である。問ふ人は、たとひ一通りは知つて居ながらも、更に判然と知りたと思つて問ふのかも知れない。又、本當に知らない人も、無いと云ことがどうして云へよう。だから問はれた事は、明らかに云聞かせてやるのが、穩に聞えるものである。又斯う云場合がある、問ふ人がまだ聞いたことの無い事を、こちらは自分で知つてるものだから、それにつけても、あの人の事はあさましいことですなア、などとだけ云つてやつて、その事がどう云事と云ことを云つてやらないと云場合がある。こんな時、問うた方では、ハテナそれはどんな事だらうと、更に再び使を派して訊きにやられねならぬ。斯う云事は、厭なことがある。なにも一度でスラ／＼と明快に済むやうにしたが宜いのである。世間一般にはまう誰も知つて、陳腐になつてるやうな事でも、或境遇の人には、これが聞えなかつたと云やうな事もあるものだ。だから、再質問の必要の無いやうに、不明な箇所の無いやうに判然と、告げてやると云事が、宜い。決して斯うすることが悪いと云訣は無い。こんな不明の返事をするなど云事は、世事に馴れぬ人のよくする事である。

【評】 私はこの適切な例を、つい此頃経験した。私が宇宙不可解の煩悶に、血を吐くやうな思ひをした時、誰かよい先生に就きたいと思つて、かう云方面に知人のある甲乙二知己に、誰がよからうかと問合せの手紙を出した。すると、甲からは、誰々が宜からうと、二三の人を教へ、住所なども親切に教へて呉れた。乙からは、「眞に見性した人(私の問合せの

文句にこの語があつたのだ)と云者は、先づ本郷區西片町沼波瓊音、何區何町何某(乙自身の住所姓名を書いて)ぐらゐのものである。盡日春を尋れて春にあはず。聊か以て愚ならずや。嗚」と云返事が来た。この乙と云人は私を戒めて呉れる積りでもあつたらうが、又、知らずしもあらず、ありの儘にいばむは、をこがまし」と云風な氣持も確にあつたに違無い。甲は私と云ものをよく知つてる人、乙は私をまだよく知らない人であつた故でもある。こんな場合に「盡日春を尋れて」など云返事を書くな、甲のやうに書け、と兼好は云つてるのである。

「人はまだ聞き及ばぬ……」のところ、例の兼好獨特の綿密な注意觀察をして居るのである。
「聞きもらすこともあれば」とある本よりは「あたりもあれば」の方が宜い。
こゝらには、兼好と云人の圓い温い人格が見えて、なつかしい。

第二百三十五段

主ある家には、すゞろなる人、心の儘に入り來る事無し。主人無き所には、道行人みだりに立ち入り、狐鼻やうのものも、人氣にせかれねば、所得顔に入り住み、木魂などいふけしからぬ形も、現はるゝものなり。

「すゞろなる人」用の無い人。
「道行人」通行人。
「人氣」人間の氣。氣を強く云へば勢なり。

「せかれれば」妨げられぬは。「木魂」老樹の精靈。山谷などにて音の反響するもこのもの業と信ぜられたり。

「けしからぬ」けしかりとは異しくあり、と云語、けしからぬはその反対なれど、慣用にてこの否定の語も肯定の語と同じき意に用ひらる、こゝも異しかるの意、即ち怪しきの意今云語と同じきなり。「虚空」物の無きところと云意、こゝにては「そら」の意にはあらず。「念々」いろ／＼なおもひ。「ほしきまゝに」ほしきまゝに。「そこばく」澤山。

又、鏡には、色形無き故に、萬の影來りてうつる。鏡に色形あらましかば、うつらざらまし。虚空よく物を容る。我等が心に、念々の、ほしきまゝに來り浮ぶも、心といふもの、無きにやあらむ。心に主あらましかば、胸のうちに、そこばくの事は、入り來らざらまし。

【譯】主人のある家へは、用も無い人が勝手に這入つて來ると云事は無い。主人の無い所へは、通行人がむやみに這入り込む。人間ばかりでは無く、狐、梟などいふやうな物も、人つ氣が無いので、自由に入り込んで、我れ所を得たりと云様子で、悠々とそこに住む。又こんな普通の鳥獸のみならず、木魂など云妖怪までが現はれるやうになるものである。又、鏡にどんな物でもうつるのは、鏡そのものに色も形も無いから、萬物の影がそれにうつるのである。空なる所に物は這入るのである。我々の心に、いろ／＼な念ひが、それからそれへと勝手次第に起るのは、これア即ち心と云もの、無い爲では無からうか。心と云ものが假にあるとしたところが、其主人が無いのぢや無いか。心に主宰者が若し有るのなら、胸に、こんないろ／＼様々の事が、這入つて來ない訣である。

【評】これは兼好が教訓をしたのでは無い。兼好が却て教訓を乞うて居るのである。兼好の懷疑の自白である。こんなことは、誰でも一讀すれば直ぐ解ることではあるが、諸註書にこれを教訓と取つて、「心の主人公を取守るべきことをいへり」などと書いてあるから、こんなことまで理つて置かれねばならぬのだ。

「心といふもの、無きにやあらむ」と、「心に主あらましかば」との間に、たとひ心といふもの有りとするも、と云意が省かれて居る。

有象無象を問はず、一切の萬有、皆空であつて同時に實である。心もさうである。心は有る、心は無いのである。しかし有相に立つて、心を見れば、もとより我が心は我が心で、他人の心とは違ふ。この違はせる所以の物を指して主と云ことが出来る。

無差別相を見れば、物質界が總て境界無く一續きになつて居る如く、心も亦、箇々の境界無く一續きになつて居るのである。いろんな物がこの一續きの心を旅行して歩く。しかし思へ、君が東京に居る時と、大阪に居る時とは、君自らは、ちつとも變らぬと云張るかも知れぬが、實際は、東京に居る時の君と、大阪に居る時の君とは、變つて居るのですぞ。それは何故變るか云へば、君は東京に居る時は、「東京」と云ものに主宰されて居り、大阪に居る時は、「大阪」と云ものに主宰されて居る。心持から何から必ずこの主宰の力の下に變らせられるのである。そのやうに、こゝに甲なら甲と云ものが、私の心にうつる。又君の心にうつる。私の心にうつつた甲と、君の心にうつつた甲とは違つて居るのだ。甲と云ふものが心界を旅行してゆく時、その場所々々で變りつゝ行くのだ。この變らせる所以のものは即ち我に存する心である。又心の主宰とも云へるのである。なほ私は斯う云ことに就ては、拙著「始めて確信し得たる全實在」に詳しく書いたから、それを見ていたゞきたい。兼好微笑するや否や。しなりだり。

又、心に主あらましかば、胸のうちに、そこばくの事は、入り來らざらまし。

第二百三十六段

「出雲」今、丹波國桑田郡千歳村大字千歳のうちの地名、こゝに出雲神社あり、現存、國幣中社にして丹波の國の一宮なり。

「大社」出雲の大社、即ち今、出雲國簸川郡杵築町の杵築神社のこと大國主神を祀る。

「しだの某」志太氏の某と云なるべし、誰とも知れず。

「知る所」知行所。

「聖海上人」傳知れず。

「誘ひて」志太が。

「いざたまへ」誘ふ詞、サアいらつしやい。

「かゝりもちひ召させむ」お萩でも御馳走しませう。田舎のこと故大し。

た御馳走は出来ぬの意。

「信」信仰心。

「獅子狛犬」狛犬は高麗の犬なり、猛犬なり、天皇御座の御前又は神社の前後に獅子の像と高麗犬の像とを向ひ合はせて置き、鬼魅を避く、向つて左獅子、右狛犬なり、獅子は口を開き、狛犬は口をつくむ。

「背きて」獅子と狛犬が背中合せ。

「後様」後向き。

「この獅子の立ちやう」獅子、こま犬と云を略して獅子とのみ云なり。

「殿ばら」君たち。

「殊勝の事」尊き事。この獅子狛犬の相背きたる事を云。

「おとなしく」大人らしく。貫目ある。

「習ひ」秘傳事。

丹波に出雲といふ所あり。大社をうつして、めでたく造れり。しだの

某とかや知る所なれば、秋の頃、聖海上人、其外も、人數多誘ひて、

「いざたまへ、出雲拜みに。かゝりもちひ召させむ」とて具しもて行きた

るに、各拜みて、ゆゑしく信起したり。御前なる獅子狛犬、背きて後様

に立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや。この獅子の立

ちやう、いとめづらし。深き故あらむ」と涙ぐみて、「如何に殿ばら。殊勝

の事は御覽じ咎めずや。無下なり」と云へば、各怪しみて、「まことに、他

に異なりけり。都の土産に語らむ」など云ふに、上人なほ床しがりて、

おとなしく、物知りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立

てられやう、定めて、習ひあることに侍らむ。ちと承らばや」と云はれ

ければ、「其事に候。さがなき童部どもの仕りける、奇怪に候事なり」と

て、さし寄りて、据ゑ直して去にければ、上人の感涙、いたづらになり
にけり。

【譯】丹波國に出雲と云所がある。こゝに出雲大社をうつして、立派に社が出来て居る。志太の某とか云者の知行所であつたので、この志太が、秋の頃に、聖海上人と云僧其他幾人も誘つて、「さアおいでなさい、出雲神社拜みに。田舎お萩でも馳走しませうに」と云つて、その人達を連れて行つた。すると、連れられて行つた人達は、出雲神社を拜して、甚しく信仰心を起した。其の社の前の獅子と狛犬が、普通どこでも向ひ合つてゐるのだが、こゝのは背中合せで、後向きに立つた。聖海上人これを見てスツカリ感服して了つた。「あゝ結構なことな、この獅子の立ちやう、まことに珍しい。定めしこれには深いいはれがあることで御座りませう」と感涙を浮べて、「どうで御座る皆さん。斯う云尊い事に、目がつきませんか。しやうの無い人達だ」と云から、皆も注目して「成程々々、本當に外とは違つてますなア。都へ土産話に、この事を話しませう」などと云つたが、聖海上人は、なほこの由來を聞きながら、貫目のある、物を知つて居さうな顔をした神官を呼んで、「このお社の獅子をお立てなさる工合、このうしろ向き、と云ことには、嗚かし、何か秘傳事のあることで御座りませう。ちとそのいはれを御聞き申したいものですな」と云はれたら、神官は、「や、その事で御座ります。わるい子供たちが、こんな悪るさなしましたので、けしからん事で御座る」と云つて、獅子狛犬のところへ寄つて、向ひ合ひに置き直して去つたので、上人の感涙は、無駄な涙になつて了つた。

第二百三十六段

「さがなき」祥無きなり。わるいと云こと。「わらばべ」子供たち。「べ」は群と云こと。「奇怪に候」けしからん

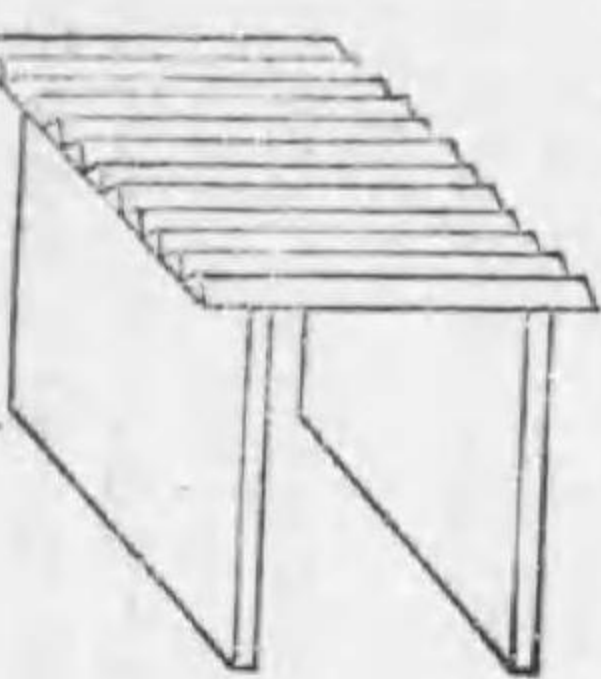
【評】別に深い意味を含んで、書いたと云では無い。このをかした事實を、興味を以て書き記したのである。それア偶然の些事を、こちらの心からで、大きく見る、意味ありげに見ると云誤が、随分我々もやつてることであらう、と云つた心は有つてゐる。しかしそれを云ひたさに書いたのでは無い。それはこの事の興味の次に起る別産物なのである。

この敘事もよく書いてある。斯う云ことを書く時には、決して迫つた氣分で無く、其の事件の中の氣分になりおほせて書いて行く。うまいものである。「かいまちひ召させむ」、今で云へば田舎料理でも振舞ひませう、と云所、この言が、その折の時代風で嬉しい。恍として、其時代の心持になる心地がする。聖海上人と云人が、いかにもよく寫されて居る。「あなめでたや：：」と感心したが、自分獨りで感ずるのでは足らず、同伴者の皆々感じて貰ひたい、皆が平氣で居るのが、腹立たしくもなる。それで「いかに殿原：：」と怒つて居る。この怒りが面白い。この時の樞幕で、愈しまひの落が面白くなつてゐる。神官の答も面白く書いて居る。神官は、上人の間ひを、上人の心通りに解して居ない。一本參られたと思つた。だから、故よしあるにも侍らず、などとも何とも云はず、こんな事した子供に對して「奇怪に候ことなり」と怒り、且つ上人の手前面目無がつても居る。こゝが實に面白い。そして兼好は「上人の感涙いたづらになりけり」と極めてサラリと書き捨て、知らん顔して居る。しかし、上人が殿原の手前面目ながる様子も、若い殿原（上人の口のききやうで若い殿原と云ことも自ら解つてゐる）の上人をクス／＼笑ふ様子も、獅子と狛犬が今は向き合ひになつて知らん顔してゐる様子も、すべて讀者の心に入り／＼と浮ぶでは無いが。

この頃の獅子狛犬は、臺石に作りつけでは無く、社の縁に、唯置いてあつたので、子供でもそれを置きかへなど出来たのである。

第二百三十七段

柳箱やないばこに据たてうるものは、縦様たてざま、横様よこざま、物によるべきにや。卷物などは、縦様に置きて、木のあひだ間より、紙ひねりを通して、結むすひつく。硯も、縦様に置きたる、筆こころ轉ころばす宜よしと三條右大臣殿仰せられき。勘解由かでのこうぢ小路の家かの、能書の人々は、假にも縦様に置かるゝ事無し。必ず横様に据たてゑられ侍りき。



「柳箱」とも、柳の細枝を編みて作れる箱を云其蓋を物を載する臺にも用ひたり。後に、別に、柳の細枝を紙捻にて板と脚とに編み結びて、小机の形に作りて、物を載する臺とするを云、更に後には、三角なる白木の棒を並べて、板にて脚を作れるをも云、これ等の臺は冠、靴、硯、短冊など載する用とす。こゝに云はる最後のものなるべし、即ち圖の如し。

【譯】柳箱に物を据ゑるのに、縦に置くべきものが、横に置くべきものと云に就て、よく人が迷ふことであるが、その縦横は、置く物によつて、臨機應變にすべきものらしい。卷物などは、縦、即ち木の並びに並行して置いて、木のすきまから紙捻を通して、結びつけるものである。三條右大臣殿は、硯も縦に置くと、筆が木の目へはまるから、轉がらないで、よい、と仰しやつた。しかし勘解由小路家の書道大家の人たちは、これと反對で、決して硯を縦には置かれない。必ず横に据ゑられた。

【評】三條右大臣殿の言がどこからか解らぬが、どうも「硯も」から以後らしく思はれる。

第二百三十七段

「縦様」棒の並びたるに並行するを云。○「木のあはひ」三角棒のあひだに隙あれば斯く云。○「紙ひねり」こより。○「筆ころばす」筆ころがらす。○「三條右大臣殿」誰を指せるに

や不明。○「勘解由小路の家」行成の子孫の家にて世尊寺と稱す、書道を重んず。

第二百三十八段

「近友」傳知れず。
「自讃」自分を賞むること。

「させること……」大したことで無いことばかり。

「連れて」従へると云意なし、同行してと云のみの意。

「最勝光院」今の洛東南禪寺域中に在りし寺、後白河中宮建春門院の願により承安三年創建されしものなり。

「當代」後醍醐天皇。

「坊」春宮坊の略にて、皇太子の位と云ことに云。

「万里小路殿」藤原宣房及び其子藤房の住みし家なるべし、万里小路に在り。

「堀川大納言殿」藤原師信のこと、當時の春宮大夫。

「御曹司」部屋。

「参りたりしに」兼好が御所にて「東宮様のこと」

「紫の……」論語陽貨篇「子曰、惡紫之奪朱也。」

「そこくの程」どの邊のところ。何枚目あた

御隨身近友が自讃とて、七ヶ條書き留めたる事あり。皆、馬藝、させること無き事どもなり。その例を思ひて、自讃の事、七つあり。

【譯】御隨身の近友は、自讃を七ヶ條書きとめて残した。それを見ると、皆馬術に關したことで、一寸した事ばかり書きつられてある。愚僧も一つ、この先例に習つて、自讃を七つ書きました。即ち左の通り。

一、人數多連れて、花見歩きしに、最勝光院の邊にて、男の馬を走らしむるを見て、「今一度馬を走するものならば、馬倒れて落つべし。暫し見給へ」とて、立ちどまりたるに、又馬を走す。とどむる所にて、馬を引き倒して、乗る人泥土の中に轉び入る。その詞の誤らざることを、人皆感ず。

【譯】第一、私が大勢の人と一緒に、花見に歩いた時のこと。最勝光院の邊で、一人の男が

馬に乗つて走らせて居た。それを私が見て、「あの男が、もう一度走らせたら、屹度馬が倒れて、あの男は落ちますよ。一寸見て居なさい」と云つて、立ちどまつて見て居ると、其男は再び馬を走らせた。そして馬を止めようとする所で、引きやうが悪くて馬が倒れて、乗つた男は、泥の中へ轉がり落ちた。私の豫言が中つたのを、皆が感服した。

一、當代いまだ坊におはしまし、頃、万里小路殿、御所なりしに、堀川大納言殿伺候し給ひし御曹司へ、用ありて参りたりしに、論語の四五六の卷をくりひろげ給ひて、「只今御所にて、紫の朱うばふことをにくむ、といふ文を、御覽せられたき事ありて、御本を御覽すれども、御覽じ出だされぬなり。なほよく引き見よ、と仰せごとにて求むるなり」と仰せらるゝに、「九の卷のそこくの程に侍り」と申したりしかば、「あな嬉し」とて、もて参らせ給ひき。かほどの事は、見ども、常の事なれど、昔の人は、聊かの事をも、いみじく自讃したるなり。後鳥羽院の、御歌に、「袖と袂と、一首のうち悪しかりなむや」と、定家卿に尋ね仰せられたるに、「秋の野の草の袂か花すゝき穗に出でて招く袖と見ゆらむ」と侍

第二百三十八段

りなど云なり。
「御歌に御自作の御歌に就て、と解して後の御言につゞけるべし。
「秋の野の……」この歌古今集卷四、秋歌上にあり、はし書「寛平の御時きさいの宮の歌合の歌」、作者、在原棟梁「何事が候ふべき」構ひません。
「本歌」根拠になる歌、
「證歌」と云意。
「覺悟す」覺えて居た。
「冥加」神佛の加護。
「高運」非常によい運。
「九條相國伊通公」藤原伊通のこと。傳前出。
「款狀」己れ官位を望むとて上へ奉る狀なり。
「又、訴訟に就ての狀をも云。」
「題目」箇條と云に同じ

れば、何事が候ふべき」と申されたる事も、「時にあたりて、本歌を覺悟す。道の冥加なり。高運なり」など、ことごとくしく記し置かれ侍るなり。九條相國伊通公これみちの款狀くわじやうにも、ことなること無き題目をも、書きのせて、自讃せられたり。

【譯】 第二、今上まだ東宮でおいでになつた頃、萬里小路殿が東宮御所であつたが、そのの一室に堀川大納言殿が伺候して居られた折、私はこの大納言殿に用事があつて、其室へ行つたら折から大納言殿は、論語の四五六の卷を繰展げて、「今、殿下が、紫の朱うばふことをにくむ、と云文を御覽になるべき必要がおこつて、御手もとの論語を殿下が御探しになつたが、どこにあるのか御探し當てにならないのです。なほ其方よく探して見てくれ、と仰せになつたので、今探して居るのです」と仰しやつたから、私は、「それは九の卷のかうくいふ邊のところにあります」と申したら、大納言殿「やれく嬉しや」と云つて、そこを出して殿下の許へ持つておいでになつた。かう云事がありました。こんな事を覺えてると云ことは子供でもやることで、何も私がこれを堂々と自讃する價は無いのではあるが、昔の人は、一寸の事も、堂々と自讃したものですよ。後鳥羽院が御作りになつた御歌に、「袖」と「袂」と一緒に入れて遊ばしたので、それに就て、「袖と云詞と、袂と云詞と、一首の中へ入れては悪いだらうか」と、定家卿に御尋ねになつたれば、卿「秋の野の草の袂が花すゝき穂に出でて招く袖と見ゆらむ」と云歌が御座りますから、決して構ふことはありませぬ」と答へられ

た、この事を、卿は自ら「斯る時に際して、直ちに證據になる歌を覺えて居て、すぐに奉答の出來たのは、斯道に就て神佛の加護があつたのである。我が運の非常によかつたのである」などと、大變なことに記して置かれた。九條相國伊通公が、上へお出しになつた官位志望の狀にも、大したことでも無い箇條をも、書いて、自分のえらいと云事の證據にして居られる。

一、常在じやうざい光院くわういんのつき鐘かねの銘は、在兼卿あひかねの草さうなり。行房朝臣ゆきふさ、清書して、鑄型いたがたにうつさせむとせしに、奉行の入道にゅうだう、かの草さうを取り出でて見せ侍りしに、「花の外はなに夕ゆふを送れば聲百里こゝろに聞ゆといふ句あり。陽唐やうたうの韻うたと見ゆるに、百里、誤りか」と申したりしに、「よくぞ見せ奉りける。おのれが高名かうみやうなり」とて、筆者の許へ云ひやりたるに、「誤り侍りけり。數行かずぎやうとなほさるべし」と返事侍りき。「數行」もいかなるべきにか。若し「數歩」の心か。おぼつかなし。

「行房朝臣」藤原行房、家を一條と號す、行成卿の末の家にて書家たり、官、藏人頭左近衛中將に至る、笠置城陥るに及び敵に投ず、後、脱し歸りて後醍醐帝の隱岐に幸するに従ふ、

【譯】 第三、常在光院の鐘の銘は、在兼卿が原稿を作つた。原稿が出來たので、書家の藤原行房朝臣が、これを清書して、いよく鑄型にうつさうと云手順になつた際、其事を奉行して居る入道が、その原稿を、偶然私に見せた。見ると、「花の外に夕を送れば聲百里に聞ゆ」と云句がある。私は云つた、「この銘は陽唐の韻をふんであるのに、こゝの所が韻に合はな

延元中、新田義貞皇太子を奉じて北國に行き行房これに従ふ、金崎城陥るに及びて行房之に死す。
「奉行の入道」その鑄鐘の事務を取る人、その人入道なるべし。
「陽唐の韻」韻の名なり「里」の字は紙旨の韻なれば他の句尾と韻合はぬなり。
「高名」手柄。
「筆者」在兼。

「三塔順禮」比叡山を三つに分つ、東塔、西塔、横川の三つなり、その三塔の諸堂を拜し回るを云。
「佐理」藤原佐理、参議たり、長徳四年七月薨す、五十五歳、著名の書家、普通サリと音讀す。
「行成、藤原行成、寛仁中太宰権帥を兼ね、權

い。この百里と云のは、韻を誤つたのであらうか」と云つたれば、入道大に喜び、「まあ、あなたにお見せ申してよいことをしました。私の手柄になります」と云つて、在兼卿の所へ入道が早速云つてやつた。すると、彼から「成程、私の間違でした。どうか數行と直して下さい」との返事があつた、これで韻は合つたが、「數行」となほしてもどうであらう、變ぢや無いだらうか。或は「數歩」と云意味が知らん。よく作者の心がわからない。

一、人數多伴ひて、三塔順禮の事侍りしに、横川の常行堂のうち、龍華院に書ける古き額あり。「佐理、行成の間疑ひありて、未だ決せず」と、申し傳へたり」と、堂僧ことごとくしく申し侍りしを、「行成ならば裏書あるべし。佐理ならば裏書あるべからず」と云ひたりしに、裏は塵積り蟲の巢にていぶせげなるを、よく掃き拭ひて、各見侍りしに、行成位署名字年號さだかに見え侍りしかば、人皆興に入る。

【譯】 第四、あまたの人と一緒に、叡山の三塔順禮をした時、横川の常行堂の中に、龍華院と書いた古い額があつた。堂の坊主が「この額の筆者は、佐理か行成かで御座るが、どちらともまだわからない、と云ふことになつて居ります」と、仰山さうに云ひましたから、私は「行成ならば、裏書があらう。佐理なら裏書が無い筈です」と云つたれば、それから裏を検査することになつた。裏は塵が積つて、蟲の巢で、ムサ／＼してゐるのを、よく掃いて、拭つ

て、皆々見ましたところ、行成の位官名字年號が判然と見えましてので、皆大いに面白かつた。

一、那蘭陀寺にて、道眼ひじり、談義せしに、八災といふことを忘れて、「誰か覚え給ふ」といひしを、所化皆覚えざりしに、局のうちより、これ／＼にやと、言ひ出したれば、いみじく感じ侍りき。

【譯】 第五、那蘭陀寺で、道眼聖が講演をした時に、聖が「八災」が何々であるかと云事を忘れて、弟子達に向つて、「誰か記憶して居ませんか」と云つたが、弟子には誰も知つてゐるものは無かつたので、私は、聽聞席から、これ／＼でせう、と八災を數へて言つたれば、皆大變私に感服をしました。

一、賢助僧正に伴ひて、加持香水を見侍りしに、未だ果てぬ程に、僧正歸りて侍りしに、陣の外まで、僧都見えす。法師どもを返して、求めさするに、「同じ様な大衆多くて、得求めあはず」と云ひて、いと久しく出でたりしを、「あなわびし。それ求めて在せよ」と云はれしに、歸り入りて、やがて具して出でぬ。

【譯】 第六、賢助僧正と一緒に、加持香水の御式を拜見に行きました時、まだ式の終らぬう

大納言になる、萬壽四年薨す年五十六、著名の書家、普通カウセイと音讀す。
「位著」官位を書くこと
「談義」佛法の講演すること。
「八災」修行の妨をなすものを八つ數へたるなり。
憂、苦、喜、樂、尋、伺、出息、入息是れなり。尋も伺も知らむとする心の働きなり、尋は大づかみなる初念を云、伺はその初念の後における細心の分別を指す出入息は呼吸を指す、呼吸すらも妨になるを云へり。
「所化」僧家にて、弟子を云。
「局」普通の聽聞席ならず、簾などにて別にこひたる特別席。
「賢助僧正」洞院太政大

臣藤原公守の子、弘安三年に生る、護持僧、東寺一長者、醍醐座主たり。

「加持香水」香水を加持して天子に灑ぎ奉る式。此法は後七日御修法終りて、後に其時に加持せる香水を南殿又は清涼殿に運びて机上に備へ出御を待ち奉り、御修法の大阿闍梨は八祖相承の五股杵と念珠を携へ、香水の机下に寄り、五股杵を以て香水を加持し、次に右の器の散杖を以て加持し、次に左の器の散杖を取て香水を玉體に三度灑ぎ、主上の心月輪の上に如意寶珠あり、此寶珠、室生山の寶珠と一體無二にして萬寶を雨らし給ふと觀するなり。

加持とは眞言の咒法にて、これを爲す者よく佛を己れに感日なり。

「二月十五日」涅槃會の日なり。
「千本の寺」千本前に出づ、千本の寺とは千本釋迦堂即ち大報恩寺なるべし。後より「普通の人の入口より入りたるなり。」

「姿、匂」この匂は氣韻を云、「様子がい」など云「様子」にあたる。「居かゝれば」よつかゝるを云。
「匂」こゝは女の衣の香匂。
「便悪し」工合がわるい
「立ちぬ」立つて出で了つた。

「御所さま」御所がたに奉公の。
「そゝろ言」むだ話。
「心得待られ」わかりません。
「御局 聽聞の席。よき人の爲に簾など下ろして、なみ／＼の聽聞席と別にしてある所を云「人」貴き女性、特に名を記さず。
「作り立て、普通の人のやうにいで立たせ。
「便よくば」好機を得たらば。
「かけむものぞ」かける

ちに、僧正が立つて歸途に就かれた。某僧都が同道の一人であつたが、途で遇ふつもり所、陣の外まで来て、あはれない。それで供の法師等を、構内へ立戻らせて、僧都を探させたところが、久しく經つてから、その法師等が、構外へ出て来て、僧正等の待つてるところへ来て、「どうも方々尋ねましたが、同じやうな僧侶が澤山で、どこに居られるのかわかりませんでした」と云つた。「どうも困まつたなア」と僧正は云つて、私に、「あなた一つ探して来て下さい」と云はれたので、私は中へ這入つて、直きに僧都を探して一緒に連れて來ました。

じ、而して手に三股杵の印を結び、口に諸機を禁ずるの咒を誦し、心其物體を淨めむとの一念に住して諸物を加持すれば、其物欲するが如く清めらるゝなり、○「陣」眞言院に法事ある時、外に兵、陣を張りて護るなり、そこを陣と云○「僧都」賢助僧正と同道の人なり、誰とも知れず。○「法師どもを」僧正の供の法師等なり。○「返して」法師等に又構内に立戻らせて。○「大衆」大勢の僧と云こと。○「出でたりしを」構外に。○「あなわびし」困るなア。○「それ」僧都の「云はれし」兼好に。

一、二月十五日、月あかき夜、うち更けて、千本の寺に詣でて、後より入りて、獨り顔深く隠して、聽聞し侍りしに、優なる女の、姿、匂、人よりことなるが、分け入りて、膝に居かゝれば、匂なども移るばかりなれば便悪しと思ひて、すり退きたるに、なほ居寄りて、同じ様なれば、立ちぬ。その後、或御所さまの古き女房の、そぞろ言云はれし序に、「無下に色無き人に在しけりと、見落し奉ることなむありし。情無しと恨み奉る人なむある」と宣給ひ出だしたるに、「更にこそ心得侍らぬ」と申しして止みぬ。この事、後に聞き侍りしは、かの聽聞の夜、御局のうちより、人の御覽じ知りて、候ふ女房を作り立て、出だし給ひて、「便よくば言葉などかけむものぞ。其有様參りて申せ。興あらむ」とて、はかり給ひけるとぞ。

【譯】第七、二月十五日、月の明らかな夜、更けてから、千本の釋迦堂へ、涅槃會の法事の參詣に行きました。常人の入口なる後の方から這入つて、連も無く、獨りで、知つた人に見られるが面倒さに、顔をスツポリと物で蔽つて、聽聞して居たところが、品のよい女の、形といひ、様子といひ、人並すぐれたのが、人を分けて這入つて來て、私のそばに坐つて、私の膝に寄つた。其の女の香の香なども、私の身にうつる程に密著するので、工合が悪いと思つて、それをズツて退いた。すると、女は又ついて來て、寄りかゝること、前と同じ様であるので、私は遂に席を立つて、出で了つた。其の後、或御所に仕へて居る老いたる女房にあつた時、其の人が、私にいろ／＼冗談を云はれたが、そのうちこんなことを云はれた。○「あなたは、極端に色氣の無い人である、と輕蔑し申すべき事實がありました。あなたを情知らずだと恨み申して居る人がありますよ」と云はれたので、私は、「全く何の事が御言葉

んだよ。
「ばかり」だまし。

がわかりませぬ」と申して、話はそれなりになつた。以上の事に就いて、後日聞きました所によれば、あの千本の寺で聴聞した夜、特別席の中から、或貴い女性が、私が群集に紛れ込んで居たのを見付け出されて、侍女を並々の女にいでたゞせて、其の席からこちらへ派して、その女に、貴人が「工合よく行つたら、言葉をかけてやるんですよ。どうするか、彼をした様子を、歸つてから話すんですよ。面白からうから」と云ひつけて、私をダマして遊ぶお積りだつたのだとさ。

【評】 私は、こゝに至つて嬉しくてたまらぬ。エヘン僕はえらいんだよ、と兼好が、冗談半分に、自慢を云列べたのである。自讃などするとは怪しからぬ、前に「人としては善にほこらず」と書いた筆で、よくこんな事が書けたものだ、と云人は、徒然草など讀んだとてわかるもんぢや無い。又實際の所を云へば、さう云人は、道徳専門の本を見ても、低い程度のものは解らうが、高いものは、もはや本當に解リツこは無いのだ。

これも道樂さ。自讃も道樂さ、さうかと云つて、これは全部それでは冗談かと云と、さうでは無い。道樂らしく云つた中で、なか／＼主張を有つてゐるのがある。物の意味をたゞ一つに解しようとする人には、解りにくい所だ。

この近友の自讃七ヶ條と云ふものが、やはりこんなものに違ない。ともかく自ら「自讃」と標榜して書いたのだから、面白いものに違ひない。近友と云人物は屹度面白い男であつたのだらう。これを兼好が見て、こいつは面白いと思つて、早速その眞似をしたのである。

「馬藝、させること無きことゞもなり」と云のは、馬藝をはじめいろいろなきことが書いてあ

る。皆大事件を書いたわけでは無い、と云ふのである。この近友の自讃と云ふものが現存してゐたら面白からうが、わからぬ。しかし梁塵秘鈔が出現する代だから、そのうち何處かの隅から、ヒョイと出ないとも限らない。

第一、「今一度」とあるのを見ると、何んでも廣場で、まはつて駈けさせたのであらう。一まはりで止せばよいが、もう一まはりやつたら落ちよう、と云つたのだとどむる所にて……とある。際どい所で、兼好の豫言が中つたと云ふものだ。よく自轉車の曲乗をして居るのを見る。もうあの位の所で止めれば宜いに、と思つてると、先生調子に乗つて、いろんなことを試みるうちに、落ちる。つまりこれなのである。騎者の騎り振りのシットリとしない、向う見ずな様子が、兼好をしてこの豫言をなさしめたのである。最初に、馬のことを書いたのは、あくまで近友式に行つたのである。そしてあまり大した手柄で無いことから始めて居る。兼好は、この書く順序にも意匠をなして居る。

第二、この自讃は、古人のくだらぬ事を自讃するのを嘲るのが主意で書いたのである。頗る面白い。先づ論語のこの自讃を云つておいて、そんなことが自讃になるか、と云はれぬさきに、「兒どもも常のことなれど、と自分で云つて置いて、ハ、ハ昔の人も、先づこのつれの自讃をして居ますよ。古今集にある「秋の野」の歌を、歌の専門家たる定家が知つたのがそれが如何した。あたり前のことぢや無いか、と云つた猛烈な嘲笑を浴びせて、九條相國までトバシリを被つて居る。この定家のことは何にあるか私は知らぬ。明月記にありさうなことなので、調べて見たが、無かつた。もつとも明月記は缺けた所がある。或は今缺けて居る

部分にあつたことも知れない。

第三、大分事が堂々として来た。兼好なかりせば、末代までの不體裁になる所だつた。數行もおぼつかなし」を、後人の書入れたと云説があるが、何だかこの筆勢が兼好らしく思はれる、しかしまア書入かも知れぬ。また書入で無いかも知れぬ。わからぬ。しかし私は、兼好の文だと思ふ。「聲數行に聞ゆ」は意味の上から云つて苦しい。兼好がこれに就て咳かすに済ましさうも無いことと思ふ。もつとも更に抗議を申し込む、そんな執念なことはしない。「おぼつかなし」と、この邊で交渉は止めておく。この態度が、いかにも兼好らしいと思ふ。

第四、佐理行成の識別法は、昔から學者間には常識と云ふやうに、ひろく知られて居ることである。兼好當時にも、さうであつた事が、こゝの書きぶりでもわかる。たゞ彼の同行者等は全くさう云方面の事を知らなかつたのである。坊主奴「どうも今日に至るまでどちらともわかりません」と、大いに深い所を云つた積りで語つたので、兼好が、何の馬鹿々々しいことを、と云氣で、遂に實地検査になつて、大手柄になつたのである。「裏は塵つもり蟲の巢にていぶせげなるを」と云ところ、一寸したことだが、見えるやうである。白い満みないな形した巢などが目の前に見える。

第五、八災と云ことを我輩が知つてたと云自讃。佛教にある成語の、數に關したものが澤山ある。それを列陳した書は、「法數」と云名稱になつて居る。大藏經にも法數の部がある。ところが、其中、「大明三藏法數」は隨分澤山集めてあるが、その中に「八災」と云のは無い。「教乘法數」にも出て居ない。佛教語の辭書中で、定評ある「佛教いろは字典」にも、これは出

てゐない。諸註書には「藏乘法數」に出て居ると書いてある。斯う書いたのは壽命院抄で、他の註書は皆それを其儘寫し書いたものらしい。さてこの「藏乘法數」と云のは元の釋可遂の編したものである。私は應永十七年に版行されたこの書を、可なりな手数をした後見るを得た。まさに壽命院抄に擧げた通りの八つの事が出て居る。但し「八災」とは無く「八災患」となつて居る。これを略して「八災」と云つたものと見える。この中、憂苦喜樂出息入息はわかるが、尋と伺とがわからぬ。さすがに「いろは字典」を引いて見ると、痒い所へ手が届くやうに解いてあつた。

第六、これも、まことに「させることなき事」ではあるが、私は兼好と云人の、なかく敏捷な一面を有つたことを感服する。

第七、これは、さすがに七ヶ條のドンジリに置いたわけあつて、實のある、景も情もある、艶ツほさと、氣高さとある、面白い事件である。月明の深更、千本の寺これを背景として、この面白い事件が起つた。「膝にゐかゝれば、にほひなどもうつるばかりなれば」、さらりと、しかも強く書いた。この事件は多分俗體の時のことであらう。誰とは知らぬが、貴人が、兼好に注意し、興味を有つて居たと云ふことは、兼好がなかく才人として、當時上流の人にひろく知られて居た様子がわかる。

この七條は、よく畫材にもされて居る。又、今の「よさのひろし」氏、昔の與謝野鐵幹氏が、「法樂の夜」と云詩を作つた。たしか明星に出てゐたのと記憶する。當時私は大變面白く思つて寫し取つて置いたが、それはこゝの第七條の趣を、ひろげ、且つ色を増したもので

ある。よく出来てるから、次に擧げる。「そと寄りてあかかものか、わが膝にあなぬか、りぬ。香油ぬる髪かみの香や、衣きぬの香や、さとうちかたり。ゆくりなき、かゝるときめき、おもはゆし。君ばあかゝる。内陣うちじんの朱蠟燭しゆろうかややかに、淨土じゆつどのひかり。法樂ほふがくの初夜はつやの黒谷くろや人中にんちゆうに、われにあかゝり、君や誰たれぞ、うちつけに、ものいはず。今鐘いまかね鳴れり。こは京きやうの舞姫まひめすがた、ものいはず、われも得問とくもんはず。よこ笛よこふえや鏡鏡かがみや、春はるの雲うみ、夜谷よやおほへり。便惡びんごしとつとすり退ひきげば、またもつと居ゐかゝる人ひとよ、わが膝ひざに袖そでこぼれ、舞扇まひせん、襟えりを出だでたり。眼まなこはあひぬ、おもて染ぞめまりぬ、火ひの如ごとき、かれのはぢろひ、眼まなこうつせばいと大おほき、しろがねの香かほ燼じんくゆれり。京きやうなれぬ、この學生がくしやうを、なでふ君きみ、面おもて知りげや。懺悔ざんげする人ひとみなば、涙なみだたれ念佛ねぶつ上げたり。天童てんどうの、らうたき見みらば、華はなかさし、手てに華はなちらし、須彌壇じゆみだんの下もと練ねりぬ。君とわれ、また眼まなこばあへり。その時ときよ、君きみばわなまき、ほのかなる、あゝひと言ことや、御名みなさいて戀こひひまつるし。うつぶせし、眼まなこはうるみたり。やはき手ては、袂たもとのしたに、今いまつよく、わが手てを取りぬ。花はな散ちらす天童てんどうは、わが前まへを三さんたび繞まわれり。」

第二百三十九段

「婁宿支那の天文学にて天の空間を二十八に分つ、二十八宿是れなり。」

八月十五日、九月十三日は、婁宿なり。この宿、清明なる故に、月をもてあそぶに、良夜とす。

り、四方に各七つあるなり、婁宿は西方の一なり。

正月一日より十二月晦日まで、この日は何宿々々と、毎日を二十八宿にあてたり。

【譯】八月十五日、及び九月十三日、この兩日は、丁度婁宿にあたる日である。この宿は清明な宿である。だから月を賞するによいのであつて、良夜とするのである。

【評】十五夜、十三夜の月を賞すると云こと、決して偶然のことで無いことを示したのである。二百十二段では、おほまかに秋月の、他季の月より本當にまさつてゐるを云ひ、こゝでは特にその中でもこの兩夜の月の清明なる所以を、當時の科學的に説明したのである。

第二百四十段

「しのぶの浦……」岩代國今の信夫郡の地に、中世頃阿武隈川の水、岩石に障へられて江浦の狀を呈し居たり、そこを、しのぶの浦といへり、この地名戀にゆかりあるより、よく戀歌に詠めり。新古今卷十二、戀歌、二條院讚岐、うちばへて苦しきものは人目のみしのぶの浦の蟹のたくなば、もその一なり。

しのぶの浦の蟹のみるめも所狭く、くらぶの山も守る人しげからむに、わりなく通はむ心の色こそ、淺からずあはれと思ふ節々の、忘れ難きことも多からめ。親同胞許して、ひたぶるに迎へすゑたらむ、いと眩かりぬべし。世にありわぶる女の、にげなき老法師、あやしの東人なりとも、賑はしきにつきて、「誘ふ水あらば」など云ふを、中人、いづ方も心にくき様に云ひなして、知られず知らぬ人を迎へもて來たらむあいなさよ。何事をか打出づる言の葉にせむ。年月のつらさを、分けこし端山のしなども相語らばむこそ、盡きせぬ言の葉にてもあらめ。すべてよ

第二百四十段

人目をしのぶと云にいひかけたり、
「蚤のみるめ、このみるめは海松布なり、唯海松と云に同じ、見る目と云にいひかく、
「所狭く窮屈、人目の關が窮屈なるなり。
「くらぶの山、くらぶの山は鞍馬山の古名なり、これも戀歌に多く詠みなれたり。古今集十二、戀歌、題しらず、坂上是則、わが戀にくらぶの山の櫻花まなく散るとも數ばまさらじこれも其一なり、戀の量多きにくらべると云かけたり。暗きと云事にも詠めり、風雅集卷一、夜梅を、中務、匂ふ香のしるべならずば梅の花くらぶの山に折り惑はまし、も其一例なり。この文は戀歌に用ひらるゝこの山を

その人の取りまかなひたらむ、うたて心づきなき事多かるべし。よき女ならむにつけても、品くんだり醜く年も長けなむ男は、「斯くあやしき身の爲に、あたら身をいたづらになさむやは」と、人も心劣りせられ、我が身は、對ひ居たらむも影恥かしく覺えなむ、いとこそあいなからめ。梅の花かうばしき夜の朧月にたゝすみ、みかきが原の露分け出でむ、在明の空も、わが身ざまに忍ばるべくも無からむ人は、たゞ色好まざらむには如かじ。

【譯】戀故に人目をしのぶ、この人目の關ゆゑにまことに窮屈で、思ふ儘にも逢はれぬ。夜の暗さに紛れて逢はむとすれど、戀人のまはりには、見張りする人が多い。まことに戀路には障礙の多いものだが、それを押通して難儀をいとす通ふ。この情の深さを、身にしみ嬉しく思うて、あの時はわが戀人はあのやうに難儀して、あの時はあアしく逢つたなどと、戀の回想は豊富なものであらう。然るに、世に所謂結婚といふものゝやうに、親や兄弟が公許して、おしつけて女を妻に娶らせる、と云こと、これは人目を忍ぶなど云世話も無く、難儀して逢ふと云で無く、實にはや公々然たるものだ。露骨千萬なことだ。斯う云結婚と云ことは厭なものだと私は思ふ。生計が立ちかされる、どうか此身の始末をつけなくては、と云境遇になつてゐる女が、似合はしからぬ老いた僧や、下品な東國人など、でも構はぬ、當時勢のあ

暗きと云とに使ひ、暗き夜にしのぶと云意を持たせたるなり。
「守る人見張りする人我が戀人のまはりには見張人多くてたやすく逢へざるを云。
「わりなく無理に押通して。
「ひたぶるに」一途に、と云こと、おしつけるを云。
「迎へすゑたらむ」妻に迎へて置くを云。
「まばゆかりぬべし」露骨にて興さむる様を云。
「世にありわぶる」暮らしかれたるを云。
「にげなき」似合はしくない。
「賑はしき」勢あり富裕なること。
「つきて」心を着ける、心を引かれるを云。
「誘ふ水あらば」古今集卷十八、雜歌、

る人なら宜いと云考になつて、「私をもらつてやらうと云つて下さる方があるなら、参りませう」と云ふので、仲人をする者が出来る。どこの仲人も、仲人と云つば、屹度さも先方を好い人のやうに云ひなすものだ。それで縁が結ばれて、知られもしない、見ず知らずの人を結びつける。これは實に詰らない、没趣味なことだ。彼等には過去が無いぢやないか。過去の無い男女が一緒になつて、一體何を話すんだらう。話の種が無いぢやないか。今まで天下晴れて逢はれなかつた頃のつらさや、いろんな障礙を押通して来た頃の話を、話合ふと云ふことは、まことにいつまで話しても話し切れぬもので、この物語の情緒が嬉しいものであるのに、その物語の種も無い結婚とは、くだらぬものだ、男女の交りを結ぶと云ことは、自分で爲すべきことだ。自分以外の人間が斡旋して一緒にして呉れたのは、疎ましい事が多いわけだ。女がよい女であつたとしても、下品な醜貌で年もとつてる男が、そのよい女を娶つたとしたら何と思はう。「こんな詰らぬ我の爲めに、惜しやあんな美しい身を棄てゝしまはずとものことだ」と、男の方で、その女の心の低さをさげすむ氣になる。そして男自身は、そんな美女と對座して居ると、自分の姿を恥かしく感ずる。さう云氣分ぢや、實に情趣も何もありません。好色と云ことは、好色すべき人柄の人がすることなのだ。梅の花が香る夜の朧月に、女のあたりに佇んだと云經驗、禁中の御垣のあたりの草の處を分けて、在明月の頃に女のもとから歸途に就くと云經驗。斯う云やうな經驗が自分にあつて、回想の材料に斯る光景があると云人が、好色はすること、そのやうな事から全く懸けはなれたやうな男は、好色心を出して、急に優美な女などを迎へるなど云ことをしないで、相當の女を迎へて

第二百四十段

文屋康秀が三河のぞうになりて縣見には得出で立たじやと云やれりける返事よめる 小野小町わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ。この歌戀には關係なきなれど、たゞ、在りわびて、どこへでも、誘はれ次第に行かうとの意をこの歌の詞を借りてこゝに云へるなり。

「いづ方もどこでも。仲人と云ふものは、どの仲人でも。○「あいなさきよつまらなさよ。○「打出づる言の葉」夫婦の間の話材。○「分けこしはやまの」新古今卷十一、戀歌、源重之筑波山は山しげ山しげけれど思ひ入るには障らざりけり。この歌をふみて云へり、は山は山の端しの方を云、しげ山は草木の繁る山と云こと。筑波山は端の方が甚だ木深き山なれども、一念思ひつめて分け入れればいかなる草木も障りにはならぬと云こと、戀の一念には何物も障りならずと云ふこと。分けこしは山の、とは斯うして一緒になるまで端山のしげ

○ 十 第二百四十一段

もするが宜いのみさ。【評】大膽に、世上結婚の没趣味な事を罵つたのである。又かれて不相應な結婚のすまじきことを説いたのである。結婚の前には密會の時代があつたので無くてはいけなさと説いてる少くとも戀愛の時代があつて、其後に來る結婚で無くては駄目だと云つて居る。エレン、ケイと云婦人が斯う云つて居る、男が、自分の愛しない女と結婚するのは罪惡である。どのやうな事情が有らうとも、愛が無ければ結婚してはならぬ。女とても其通りで、自分の愛しない男と結婚するのは、身を捨てるのだ。戀愛より出た結婚で無くては、決して眞の家庭を成さない」と云つて居る。そんなむつかしい態度で、兼好は云つて居るのぢや無い。面白く無からうぢや無いが、斯う云ふ態度で云つて居るのだ。

みを押分けて來たあの山は山の難儀さは、と回想談を寝物語にするなり○「盡きせぬ言の葉」いつまで話しても種が盡きぬ話材。○「人も」人は男を指す。○「我が身」男の身。○「影恥かしく」我がおもかげ恥かしく。○「みかきが原」みかきが原もよく戀歌によむ。千載集卷十一、戀歌、題しらす 讀人しらす いかにも御垣が原につむ芹のねにのみ泣けど知る人の無き、も其一なり。御垣が原は禁中の御垣のほとりに草生ひたるあたりを名所らしく云ひたる名なり。○「我が身さまに」自分の經驗にさう云ことが無く、さう云回想が無いやうな人は。

「住せず」不動、不變化で居ぬを云。

「立直りて」病氣が。「我にもあらず」不自覺に。「果てぬ」死ぬ。「如幻」人の生は實在のものならず幻の如きものとなり、諸經に見ゆ。「所願皆妄想なり」圓覺經に「常居ニ幻化、常不了ニ知如幻境界、令ニ妄想心云何解脱」とあり。妄想は邪思なり。「妄心迷亂す」妄心が來て我を迷亂す。「所作無くて」何の仕事もせぬなり。

望月の圓なる事は、暫くも住せずやがて缺けぬ。心とどめぬ人は、一夜の中に、さまざま變る様も見えぬにやあらむ。病の重るも、住するひま無くして、死期すでに近し。されども。未だ病急ならず、死に赴かざる程は、常住平生の念に習ひて、生の中に多くの事を爲して後、靜に道を修せむ、と思ふ程に、病を受けて死門にのぞむ時、所願一事も成せず、云ふ甲斐無くて、年月の懈怠を悔いて、この度若し立直りて、命を全くせば、夜を日につぎて、此事彼事怠らず爲してむ、と、願を起すらめど、頓て、重りぬれば、我にもあらず取亂して果てぬ。この類のみこそあらめ。此事、先づ、人々、急ぎ心得置くべし。所願を成じて後、暇ありて道に向はむとせば、所願盡くべからず。如幻の生の中に、何事をか爲さむ。總て所願皆妄想なり。所願、心に來たらば、妄心迷亂すと知りて、一事をもなすべからず。直に萬事を放下して、道に向ふ時、さはり無く所作無くて、心身ながく靜なり。

第二百四十一段

【譯】十五夜の月は圓形であるが、其圓形は、暫くの間も固定して居ない。直ぐに缺けて行

く。一夜の中にも月の形は變つて行くのであるが、注意しない人は、そんなに變るところが見えないのであらう。病氣が重くなると云ことも同じで、その重さが或状態で留まつて居ると云ひまが無い。ズン／＼重さの度が變つて行く、即ち重さがひどくなつて行く。直き死ぬ時が来るのだ。しかし、病があつてもまだそれ程重くも無く、死に近づくと云で無い間は、人間と云ものは、いつも事物の變化が見えないで固定してゐるやうに感じて居る其の習慣で、我が生のドシ／＼減じつゝあるに氣がつかず、生きて居るうちに澤山の事業をしてそれを遂げてから靜に佛道を修行せうと思つて居る。そのうちに、重病になつて愈々死際に立つと云時かへりみ省ると、自分は志した事何一つ成就して居ないのだ。まことに腑甲斐無い有様なのに氣がついて、年來の自分の怠りを後悔して嗚呼この病氣、今度若し癒つて、命を拾つたら、晝夜ぶつ通して、あの事も勉強してやらう、と云志を起すやうだが、そのうちに病氣が重くなつて来て、思はず狼狽して悶き死に、死んでしまふ。萬事皆これだ。此「死」の事を第一に、人々は早く知つておかればならぬことだ。遣りたい事を遣つてから、暇があつたら菩提の道に向はうとして居ると、其の「遣りたい事は、あとから／＼澤山出来て来て際限が無いのだ。この幻のやうな生命の間に、何を爲すべきことがあらう。」遣りたいと思ふ事は、皆妄想なのだ。遣りたいと云事」が心に出来たら、ヤ、妄心が来て乃公を迷亂させるナ、と知つて、何も爲てはいけない。人間は安靜でなくつてはならぬ。その方法は、氣のついた刻下に萬事を打棄てて、道に向ふことである。さうすれば、何の障も無く、何を爲さればならぬと云仕事も無く、心も身も、永く安靜に保ち得られるのである。

【評】 度々説いたことを、又繰返し説いたのである。要するに何もするな、と云主張であるしかし人間は到底「所作なくて」居ることは出来ぬものだ。自然がさうである。自然は一刻も休止して居ない。人間も自然の一部である。休止して居ようと思つても、それは出来ぬのだ。兼好自らでも、何もしない積りで居ても、實は事を爲て居た。斯う云「徒然草」など云偉いものを書いたのだ。この文を作つた其事、其意志は、實に今も働きつゝあるのである。ただ兼好は、こんな事は「所作」と數へなかつたまでである。

第二百四十二段

とこしなへに、違順かじゆんにつかはるゝ事はひとへに苦樂の爲なり。樂といふは好み愛する事なり。これを求むること止む時無し。樂欲する所、一ひとつには名なり。名に二種あり。行跡ぎやうせきと才藝との譽ほまれなり。二には色欲しきよく、三には味あぢはひなり。萬の願よろづひ、この三みつつには如かず。是れ顛倒てんたうの相さうより起りて、そこばくの煩わづらひあり。求めざらむには如かじ。

【譯】 人間は、いつまでも或は逆境或は順境に身を置いて、その爲に勞作して居ると云のは、唯苦樂の爲である。苦を避け樂をしたさの爲である。この樂と云のは、好み愛する事

第二百四十二段

「違順」違は心に違ふ境界、順は心に叶ふ境界逆境順境と云に同じ。「行跡」道德的に、我が行ひすぐれたりとの名を得たがるを云。「顛倒の相」俱舍論十九に「顛倒總有スル四種、一於テ無常ニ執スル常顛倒、二於テ諸苦ニ執スル樂顛倒、三於テ不淨ニ執スル淨顛倒、四於テ無我ニ執スル我顛倒」。

ある。好きな事物を求めるこの心は際限無くいつまでも続く。人間の欲する所を舉げて見ると、第一に名譽である。名譽には二種類ある。自分の行ひが聖賢の行である云名譽を欲するのと、自分の才藝がすぐれて居ると云方面で名譽を得ようとする。第二は色欲である。第三には飲食の欲である。人間の願ひと云ものは、この三つが最なるものである。ところが、斯う云願は、さかさまな考から起つたものなのだ。それで、この願の爲に、いろ／＼の煩ひが起るのだ。斯う云ことを求めないが宜い。

【評】「顛倒の相」も成程尤もの考であるが、なほこれは一面を云つたものである。無我であるが有我だ、不淨であるが淨だ、と融合した上に於ては、苦も亦可、樂も亦可の界がある。

第二百四十三段

「父」下部兼顯なり。

八やつになりし年、父に問ひて曰く、「佛はいかなるものにか候らむ」といふ。父が曰く「佛には、人のなりたるなり」と。又問ふ、「人は何として佛にはなり候やらむ」と。父、又、「佛の教によりて、なるなり」と答ふ。又問ふ、「教へ候ひける佛をば、何が教へ候ひける」と。又答ふ、「それも又、さきの佛の教によりて、なり給ふなり」と。又問ふ、「其教へ始め候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひける」と云ふ時、父「空よりや降りけむ、土よりや湧きけむ」と云ひて笑ふ。「問ひ詰められて、得答へずなり侍りつ」と、諸人しよにんに語りて興じき。

【譯】私が八歳になつた年に、父に「佛と云のはどんなものです」と訊いた。父は「人間が佛になつたのだ」と云つた。又私は尋ねた「人間は、どうして佛になつたのでせう」。父「佛に教へられて、なるのだ」。我「その佛を教へた佛は、何が教へたのです」。父「それも又、それより前の佛が在つて、其の佛の教によつて、佛になられたのだ」。我「其教へを始めてした一等初めの佛は、どんな佛であつたんです」と云つたら、父は「空から降つたのかも知れん、土から湧いたのかも知れん」と云つて笑つた父は、「問ひ詰められて、答が出来なくなりました」と云つて、皆にこのことを話して面白がりました。

【評】まことに、徒然草の結末として、然るべき妙結末である。さきのさき、後の後、ともに限りが無い。無限、無限、これがなかく／＼わからぬのだ。子供は、よくこの無限の問題を提げて、人に問ふものである。尤なことである。大抵の子供がさうである。兼好のみがさうであつたと云のでは無い。諸註者は驚異しているが、今でも、子供はよく斯る種の質問を發するのである。たゞ、この佛の問題を提げたと云所に、すでに兼好の簡性が顯はれて居る。

あゝ、これは我が幼時の問ひであつた。今思へば、抑誰がこの間に答へ得るものがあらう。斯う兼好は云放して、筆を擱いたのである。

戲言らしく書いて居る。しかし、そこに至大の畏怖が溢れてる。驚異大驚異である。

第二百四十三段

兼好法師

家系

徒然草の著者兼好は、俗の時には同じ字で兼好と云つた。氏は卜部である。天兒屋根命の裔卜部兼延と云者、一條天皇の時に神祇伯となつた。帝この者を寵し給ひ宸筆を染めて兼の字を賜つた。帝の御諱は懷仁と申すより、國音相通の兼の字を下されたので、兼延と名のつたと云ふ。この子孫に神祇伯を世襲する者が多く、且つ皆「兼」の字を名に冠した。兼延の庶流に兼茂と云者があつた。官神祇大副に至つた。この兼茂に二人の子があつた。長を兼直と云。世職を襲ぎて神祇大副に任ず。次を兼名と云。從四位下右京大夫に任ず。この兼名の子に兼顯と云のがある。治部少輔になつた。この兼顯に三人の子があつた。長男が大僧正慈遍と云人。これは南朝に伺候した人で、興國元年に神風和記三卷を撰進した。次男が兼雄。これは從五位下民部大輔になつた。三男にして末子なるのが即ち我が兼好法師である。

官位

この卜部兼好は、伏見、後伏見の間禁中の瀧口に補せられ後二條院花園院に至るまでに六位藏人に及び左兵衛尉にも任ぜられ、其頃後宇多の仙洞へも北面として参つた。普通左兵衛佐と云のは誤である。後宇多院は弘安十年に御位を伏見天皇に譲り給うたが、その後も政は院が執つておいでになつた。兼好は、この徒然草を見ると、非凡の境に上つた人であるが、これだけの趣味品格見識が通世後に始めて出来たものとは思はれぬ。且つ彼が北面に居た頃はすでに卅七歳である。だからこの頃、彼はこの徒然草に遺憾なく發揮して居る所のものを、有つて居たのである。神道は家柄のことであるからよく通じて居る筈。佛道も、長兄の關係やら、又自分

の素質から、研究して居り、有職故實の學にも趣味をもち、儒老莊をよく咀嚼し、和歌に於ては、後に頼阿淨辨慶運と並べて四天王と稱された程であるから、俗の時より無論得る所が高かつた。

一體兼好の傳と云と、必ず園太曆中に散見する兼好の事蹟と云のが第一に出て来る。それが殆ど全部と云やうな工合になつて居る。園太曆は中國相國公賢の記であつて、兼好の事はその第七卷から七十二卷にわたつて出て居ると云のである。ところが園太曆にあると云つて引用されて居るが、實は園太曆には無いのである。もつとも今傳はつて居る園太曆は缺本で觀應應安などの所は無いからわからぬが、傳はつて居る部分を調べて見るに、引用の兼好事蹟が、その同じ月日の所に無いのである。だからこれは誰かが偽作して、そして其年代の史書たる園太曆を出所として世を欺いた、と云ことが考へられる。これは浚明の類聚人物考に書いた判斷である。まことに尤な説である。しかし、この判斷に従つて、その所傳の全部を抹殺してしまふと云ことは如何であらう。事を知るには、先づ識を立て、さて其識を執つて、材料を見わけて行く。材料によつて識をももつとより多少動かして行く。さうして事を知り得るのである。すでに識が正しくて、それに合ふものを探す時には、唯無學の徒の口に存してある傳説をも重んずるでは無いが、まして兎も角詳しい兼好の傳なるものが文字に記してあつて、その中にさもありなむと思はれる箇所が随分あるのに、園太曆に無いからと云つて全部を否定するのは正しくないことと思ふ。ともかく兼好はあれだけの人間である。あれだけの人ならば、其人の傳が全く記されて傳はらぬとは信ぜられぬ。唯後世になつて、これは何に出てるのでせうと人に訊

園太曆に就て

かれた學者が、「園太曆にでも出て居よう」と答へたのが、園太曆中に散見する文と云事に云はれて了ふに至つた因かも知れない。出所を明に答へない學者は立行かぬ。この妙な習はしの爲に、古典の註には、出所捏造の記載まである。書く學者も悪いが、斯う書かせれば承知しない世人も悪い。浚明は吉野拾遺に出てある兼好の事蹟をも、吉野拾遺も疑はしい書であると云つて、抹殺せむとして居る。水谷不倒氏も、吉野拾遺に出てある兼好の事蹟は、どう思つても捨てることは出来ぬと云つて居る。私もさう思ふ。要するに、私のこれならばと信ずる識でもつて、諸先輩の書いておいた材料を選んで、こゝに記すことにするのである。

兼好は白氏文集を好んで、蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中、と云句を常に懐に入れて居た。破れると又書直して入れて居た、と云事が傳へられて居る。この句は枕草紙の一項を作つて居る句である。こんなことは成程兼好がして居たかも知れぬ。彼は錦帳の花と草庵の雨と兩つながら知り味はつた人であつた。

兼好が北面伺候中に、伊賀權守橋成忠の女、中宮の小辨と云のを戀し、成つて、通うて居たと云事が傳へられて居る。果してこの小辨と云女とであつたかわからぬが、ともかくこの頃兼好が深草に女があつて、そこへ通つて居たことは事實である。彼の家集に、

深草に通ひし比曉きぬた打つた

衣うつ夜寒の袖やしほらむあかつき露のふかくさの里

ト云歌がある。又、

つらくなり行く人に

情婦

今更にかはる契と思ふまではかなく人を頼みける哉
と云のがある。これがやはり深草の女らしい。

さて兼好三十八九歳の頃に、仙洞を辭して東國に下り、あちこち廻つた。どうして仙洞を辭して斯う云ことをしたと云のに、傳ふる所によれば、小辨との間を父權守が見付けて、女を田舎へ遣はし一間に籠めた。兼好はこれを悲しんで、身を放浪生活に投じた、と云事になつてゐる。ともかくこの東下りは出家前の出家とも云べき事である。この動機は、小辨の事か。又は小辨ならぬ別の女が深草に居て、その女との仲が歌に見えるやうに面白くない工合になつた爲か。或は女の事以外の何か不幸のやうな事があつた爲か。それは判然とは云はれぬが、どうも女の事がおもな原因であるらしく思はれる。この徒然草の所々に出てゐる、成る戀よりも成らぬ戀、妨げられた戀を味ふのが、眞に戀を知ると云ものだ、との感想が、たしかに彼自ら戀愛についての痛い經驗があつたことを示して居る。さう云痛い經驗にあつては、當時の殉情的な兼好は、この東下りを思立つたと云ことが、如何にも自然と思はれる。

鎌倉比企谷妙本寺の境内にも兼好がしばらく住んだと云ことである。又武藏國金澤にも留まつて居た。

斯くて一年程経て、後宇多院から御召があつて、都へ歸つた。かの成忠の女はこの間にすでに亡き人になつて、兼好が其家にまうでたと云ことである。このやうな事が事實であつたら、彼の出家の二の原因になつたであらうと思はれる。

此頃院はもはや政治を御執りにならず、嵯峨の大覺寺にお移りになつて、御閑散の御身の

上であつた。それで兼好の歌をお召しになつた。兼好は詠んだ歌を院に御目にかけると云ことが如何に會心のことであつたらう。細かい事はわからぬけれども、この歌御召の事だけでも、この院と兼好とは、身分の差こそあれ、心の親しい友と云やうな關係であつたことが想はれる。ところがこの院は正中元年六月廿五日に寶算五十七歳で、大覺寺殿で崩御になつた。徒然草を讀んで、兼好と云人を知り得た人は、かう云人が、戀を破られ、その爲放浪し、更に戀人の死に遭ひ、更に多年恩顧の君の崩御に遭つた、としたら、そして更にこの當時の時代の不安極まる、轉變の激しい様を察したらどうしても出家と云方角しか、この人間の進む道の無いことが解る筈である。この崩御の時の兼好の歌がある。

世の中を秋田刈るまでながむれば露も我身も置きどころ無し

何といふ悲痛な、遺瀨ない歌であらう。この心でもつて直ちに、彼は比叡の横川へ行つて、剃髪した。しかし別に法號をつけると云で無く、兼好と云俗名を其儘兼好と號した。こゝにも兼好の形の末に無造作な、一方から云へば、世を遁れてもなほ世の名を存しておくこと云、徒然草式の態度が顯れてゐるでは無いか。この時彼は四十二か三であつた。世は騒がしかつた。かの無禮講の謀議が鎌倉へ聞えて、高時が資朝俊基に下向を命じたのはこの年のことであつた。

其の後兼好は吉田の神龍院又神護寺に寓居して居たらしい。いく程も無く、彼は騒がしき都を厭うて木曾路へ行脚し、御坂のあたりにしづらく住んだ。今、信州西筑摩郡馬籠より釜ヶ樋の水上東北一里餘の所、この邊を霧ヶ原と云つて平地になつてゐる。昔こゝに人家があつて、文化中こゝから古錢を掘出したこともある。こゝに兼好の庵址がある。ところが國守がこの邊へ

雙岡
松翁を訪ふ

狩に入込むのを、あさましがつて、又東へ行き、金澤を訪ひ、なほ方々行脚して、さて都に歸り、雙岡に住み、やがてそこに無常所を設け、傍に櫻を植ゑさせた。

後村上天皇御即位の頃、彼は紀伊の玉津島神社へ參詣の途に、吉野拾遺の著者松翁を訪うた。玉津島神社は和歌の神である。松翁は前に南朝に奉仕した人で今は隱遁してゐる人である。兼好とは友人の間柄らしい。この會談が吉野拾遺に出てゐるのは、尊重すべきものであつて、兼好の一面が鮮に寫されてゐる。そこを次に引用する。

『同じ頃、兼好法師が玉津島に詣で給へるとて、尋ねおはせしに、いにしへ深く契りし中なりければ、いと嬉しくて、昔今の物語しけるに、「古法皇(後宇多)の和歌の道に深くおぼし入らせ、御なさけの淺からせ給はで、かしこき御影とならせ給ひし悲しさのまゝに、世にながらふべき心地もあらざりけらし。せめてのやる方なさに、御後の世をもと思ひ給ふるまゝに、斯る姿となり侍れども、露の命の消え難くて、かゝらむ世(亂れたる世を云)を目のあたりに見侍ることよ」と袖をしぼられけるに、「我(松翁)も先帝(後醍醐)の御なさけの忘れ難くて、御跡をも慕はまほしく思ひ給へけれども、さすがに思ひかへし侍りて、柴の戸ばそには侍れども、心は浮雲の風に漂ふらむさまして、はかなき夢路には古郷の空にも通ひ、思ひとぢむれば西の御空にもあこがれ、春の朝には吉野の花の梢にやどり、秋の夕べの哀を思ひつゞけては、さやけき月の影をも曇らせ、もろく落つる木の葉を見ては、はかなき世を思ひめぐらす袖の時雨となりて染めにし墨の衣も空しく、旅行く人を思ひ送りては、まだ見ぬ峰をも越ゆるにこそ、いかなる縁にふれ侍りて、人目絶えなむ山深きいはほの洞にもをさまらでと

國見山
寂

こそ、嘆きて過し侍れ」といへば、「まことにさには候へども、我一とせ木曾の御坂のあたりにさすらひ侍りし時、山のためすまひ、川の清き流に心とまり侍りしかば、こゝにぞ思ひとどまりぬべき所にこそ侍れとて、

思ひたつ木曾の麻ぎぬ淺くのみ染めてやむべき袖の色かはと詠じて、庵を引結びてしばし候ひしに、國の守の鷹狩に人あまた具し給うて、山深き庵のほとりまでいまして、狩し給ふさまの、あさましく堪へがたかりければ、

こゝも又浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがなとながめ捨てゝ侍りし。それよりいづ方へ心をとむべくもあらずと思ひとりて、故郷に立歸りて侍れば、世の中の亂れける程に、和歌をともしなひとして心を澄まし侍らむより外はあらじと思ひ侍るこそ」とのたまはせしにこそ、まことに世をそむく心はひとしかりけれと、そぞろに袖を絞り侍りし。』

後、伊賀へ行つて、國見山(三國岳の別稱ならむ)の麓田井庄(種生村)に住んで居たが、觀應元年四月八日(或云二月十五日、二月十八日)に年六十八にして寂した。

この伊賀へ行つたのは、かの昔の戀人の父橋成忠が、今は老齡になつて、伊賀に引籠つて居たが、昔の怨めしさも今はなか／＼忍ぶべき語らひと云心で、彼を招いたからだ云ふ傳へがある。果して然らば、兼好の刺戟の最初のものであつた女の、その父と、己が世の終り際に、陸しく語り合つた、と云ことになつて、何とも云へぬ趣が、晩年の兼好を包んでゐたことになる。斯う云ふやうな、所謂因縁と云やうな事が、實際人間の一生を文なすものであるから、

或はこの傳へのやうな事があつたのかも知れない。

又、成忠に招かれて伊賀へ行き、田井莊の密乘院に住み、其後、光嚴院の御召で都に上り、それから播洲荒陵の阿部野にしばらく住んで、又再び伊賀へ行つて、そこで了つた、と云説もある。

兼好の病中、勅によつて醫を下された事や、死後に残つた書類などの傳へば、後人虚構の奥著きものである。

今、伊賀國名賀郡種生村、草蒿寺の境内に兼好塚と云のが残つて居る。この塚は事を好む後人の建てたものであるらしい。一體徒然草は一時に驚くべき勢で世上に耽讀され、兼好に敬慕の情が集つたのは、元祿の前から元祿へかけての時代である。そして兼好の事蹟について種々の説が流布したのも元祿以後である。兼好塚なるもの、發見と云事も元祿の前から元祿へかけての時代の中の事である。

さて兼好は、出家後、おもに行脚に暮らしたが、その庵にしばらく定居の際、どんな生活をして居たかと云に、頗る貧しいことであつた。吉田に居た頃に、頼阿法師の許へ、「米賜へ。錢も欲し」と云ことを句の首尾においた歌、

夜もすゝし寢覺の垣は手枕もまでも秋にたてなき風
をくつた。頼阿からは、

夜は憂しれなく我かせこ果ては來すなほさりにたにしはし問ひませ

と云返歌が來た。「米は無し。錢少し」と入れてある。即ちこの歌を添へて、錢を少しおくつて

おこしたのである。

又兼好は、生活費を作る爲に、蔗わしろを織つて居たこともある。

寂閑童、命松丸、この二人の童を、兼好は具して居た。

これだけの事は確である。簡素な生活が偲ばれる。斯う云生活を爲しつつ、彼は徒然草を書いたのである。

徒然草と云名は、發端の言を題號としたので、後人のつけたものであらう。まことに佳い名である。

書いた場所は、いろ／＼説があるが、吉田でも書き、雙岡でも書き、伊賀でも書き續けたものであらう。

さてこれの書かれた年代の考證に就ては春湊浪話の説を擧げておかう。それは、徒然草上巻(百三十六段までを云)に、冷泉萬里小路の内裏をさとの内裏と書いてある。その内裏は建武三年の正月に焼亡したのだから、上巻は建武三年より前に書かれたものに違ない。下巻に、藤公明卿を大納言と云つてゐる。この人は建武三年五月に大納言に補任された人であるから、下巻はこの年以後に書かれたものに違ない。それで上巻は建武に吉田雙岡で書き、下巻は延元に國見山の庵で書いたものであらう。下巻の始の山月を敘する詞など國見山の庵での筆と思はれる。と云のである。

それから、この書の編成に就ては、崑玉集の記述が一般に信ぜられて居る。それは、兼好の徒然草と云ものは、兼好在世の程は誰も知る者は無かつた。兼好歿して後、かの命松丸は歌道

二童

徒然草の編成

書きたる場所

にも疎くないものであつたので、今川了俊が我が許に引取り扶持した。了俊、命松丸に、兼好の書かれたものが何か残つて居ぬかと尋ねた。命松丸答へて、歌や文があつたが、多くは庵の壁に貼られました。又私がかたみに持つて居るものもあります、と云つたので、吉田へ命松丸と、伊賀へ従者伊與太郎光貞を派して輯めさせた。伊賀の草庵では歌の集を五十枚ほど得た。文は、吉田で壁に貼つたり經卷の裏に書いてあつたのを輯めた。それに命松丸の許にあつたものや、二條の侍従(二條良基にゆかりある人か)方にあつたのをも輯めて、歌集が一冊、草紙が二冊出来た。この二冊の草紙が徒然草である。と云のである。これに就て藤岡作太郎氏は浪話の説を速断とし全篇おほよそ元徳二年以後建武三年以前の數年にわたりて出来しならむと云はれた。

ともかく今川了俊の發起、命松丸の保存及び輯集のことが、この書の成る所以であつたに違ない。しかし、この編纂排列が、命松丸等の手に成つたと云のはどうであらうか。よしそれを爲たした所が、或程度までしたゞけて、この書の各段順序は、讀んでみると、どうしても兼好が書いて行つた儘の順序と思はれる。徒然草と云書は、兼好が、それは經卷の裏に書いたか何に書いたか知らぬが、この順序で書かれて、まとまつて居たものとも思はれる。段々の心の移り行く工合、いかにも微妙に自然であつて、迎も後人の編輯でこれだけ自然にゆく筈は無いからである。この一部分が命松丸の手もとにあつて、それを組入れたと云ことはあらう。その命松丸の持つて居たものも片々で無くて、書き續けた纏つたものであつたに違ない。全く片々のを輯めたと云のは、歌の方のことであらうと思はれる。

次にこの書の流布に就て、秘抄に、「今川伊豫守貞世入道了俊、兼好法師の反古を集めて是を

流布

秘藏して坐右の記と名づく。然れども了俊坐右記甚だ遠慮すべき事と思ひよりて松翁法師に表題を乞はなければ、つれづれなる儘の一段殊勝なれば、外に求むべき事に非ずとて、つれづれ草と名付けて、今川範政の方へ傳へけるを、遠江國相良平田寺に納りぬ。宗長法師此寺の沙彌なる頃寫して、宗祇法師に見せけるより、専ら世に知る草紙とはなれり」とある。又「なぐさみ草」に、「光源氏物語は寛弘のはじめ出来しかども、百年あまり埋れて、康和の比より世上の寶となれり。此つれづれ草も、天正の比までは、名を知る人も稀なりしが、慶長の時分より世にもてあつかふ事となれり」とある。貫旨の序にも、「むかし慶長の末元和の始に此草紙の情靈を動かしばしまりて後云々」とある。實際この書に關した書の續々世に顯はれたのはこの年代からのことである。

徒然草に對する
評

今までの人は實に様々の評をこの書に加へた。全く徒然草と云書を読むと、各人の個性々々で、何とか評をしないで居られぬ書であるからだ。或人はどの段も、所謂道徳に結付けてこの書の貴き所以を述べた。或人は矛盾、散漫、不見識と罵つた。前者も後者も誤つてある。何と云つても兼好の光りをどうすることも出来ず、唯自己の淺薄な個性を衆に暴露したゞけのことである。

「物ぐるほしけれ」、書出しのこの言は、實にこの書全篇に對して、兼好自ら、しばらく小人物になつて小さな目で見て、罵つてみたのである。全く小人物はこの書を罵るべき理由、明晰なる理由をいくらかも有つてるのである。しかし徒然草は「明晰なる理由」ぐらゐでピクとせぬ賞目のある大著であるのだ。

伊勢貞丈は、この書を註釋家がむやみに教訓書にしたがるのを慨して、「註釋をつくる人強ひて人の爲に教訓の助に書けるなど云は兼好の本意にあらじ云々」と長く説いてゐる。

室鳩巢は、「明晰なる理由で攻撃した憐むべき一人である。

正徹物語には、「花はさかりに月ばくまなきをのみ見るものかほと兼好が書きたるやうなる心根持ちたる者は、世間にたゞ一人ならでは無きなり」と尊重して居る。實際我々が達人だと思ふ人の趣味は、今も皆、自らにして、徒然草趣味である、と云のは事實である。兼好は稀である。しかし兼好は唯一人では無い。この趣味（趣味の點のみで云つてみても）は兼好が創立して鼓吹したものと云へないが、「こゝろだく」と古今にわたる通つた聲で呼號した人として、どうしても兼好を、我々は重んずる。敬ふ。親しむ。愛する。

清巖茶話に、「つれ／＼草は枕草紙をつぎて書きたるものなり」と云つてゐる。

徒然之讚には、「枕草紙は和歌の夜話よはなしともいふべく、徒然草は和歌の法語なり」と云つてゐる。

たゞ形式の上のみならず、枕草紙と徒然草とは、斷つべからざる一條の連鎖がある。さうしてこの同じ連鎖が、徒然草と俳諧とも繋いでゐる。西鶴は如何に兼好に刺戟されたか。芭蕉は如何に兼好を慕うたか。その各の作品と、徒然草とを讀比べると、誰でも其程度が直ぐ解る。西鶴と芭蕉は、實に兼好の門弟子の高足なるものであつたのだ。支考は、芭蕉庵で師翁と徒然草を論じたことを書いてゐる。このやうな事は屢あつたのであらう。

松平定信は、源氏を櫻に、伊勢を梅に、狭衣を山吹に、而して徒然草を、「菊もて作りたる薬玉」に比してゐる。

徳川時代の文學と云ものを考へると、誰も、その指導者の著しき一人として兼好を認めぬ訣には行かぬ。徒然草の言ひ方の摸倣形式の摸倣のみのものでも随分澤山出来てゐる。水谷不倒氏が「源氏物語枕草紙が文學の師表と仰がれしは今更いふまでも無きことながら、徳川時代に至りて兼好法師の徒然草の如くまた俗文學の模範となりし書も稀なり。つれ／＼なるまゝに日ぐらし硯にむかひて云々なる冒頭が、いか程隨筆の書きはじめに借用せられしか、色好まざらむ男は玉の卮そこなき心地ぞすべきと云句が、いく度戯作家の筆端に繰返されしか」と云つてゐるのは其通りである。明治になつても、思ふこといはねば腹ふくるゝわざと云言が、いく度演説家の口びらきに使はれたか。かう云流行は無意味のやうであるが、こんな無意味な流行を五、百歳の後にも見るほど、徒然草の勢力は永く大きいのである。所謂道學先生から見ると、危険極まるべき徒然草を、せめて其の差障りの無い所を選抜しても、これを教科書中に入れればならぬほど、今も徒然草は行はれてゐるのである。しかし徒然草の深みは、教科書に入れられない部分に多くあるのである。教科書中に入れられてゐる部分の味も、實は中學時代の人には、迎も／＼本當には味はれぬ底のものである。

それでは既に世に立つて居る人は、この書をどう扱つて居るかと云に、嘗て雑誌「世界の日本」が名家の愛讀書を紹介した以來、これに似た金が時々方々にある毎に、意外にこの徒然草を愛讀書中に加へる人が多いのである。而して又意外にも國文の専門家の多數にはこれがどうも重ぜられて居ない。もとより文學史研究に就ての棄つべからざる一材料としては扱はれて居るが、これに身を打込む、惚込むと云人が少いやうである。又更に意外らしくも、西洋文學を

愛する側の人に、近頃追々この徒然草の愛讀者が増しつゝある。

大町桂月氏が「日本文章史」に兼好を評した言の中の「世態人情をかみわけて而かも天眞流露せる高士の趣を見るべし。兼好は眞面目にして重厚なる人也。而して亂世流離の間に修養を積み大悟したる人なり。さけいへ枯木冷灰にはあらず」と云一節はよく中つて居る。

内海月杖氏が、國學院雜誌に「兼好が趣味論としての徒然草」と云論文を掲げて、國文大家の兼好評の多く矛盾を云立にして貶するを攻撃し、「觀察力強きものは常に物の兩面を見る。兼好實に然り。然るにこれを矛盾といひ背戾といふ」と詰り、縦横に筆を揮つて兼好の人格を描出したのは痛快であつた。

評した人はいろいろあるが、明治に於て、壺天禪洞の「徒然草と兼好」と云小冊子の末段ほど熱烈痛切なるものは他にあるまいと信ずる。この書の考證などに就ては贊同の出来ぬことが多いが、私はこの著者の兼好に對する態度の嬉しさに、次に末段の節々を抜いて擧げておく。

今若し彼が出生すべき天然の隧道を破壊して之を新に時代外に作り、試みに扛擡し去つて徳川氏の盛時に置かしめよ。如何に新局面が展開すべかりしか、如何に文海の波紋を作成すべかりしか。

兆民氏の所謂無害の長者とは蓋し兼好の形容詞に非るなきか。輒ち兼好は洒然として、策無く計劃無きの好漢なりけん。便々の腹には博大の婆心あり、廓落の胸には萬斛の同情あり、一管直に能く眞情を流露して古今の心胸を淘汰するの手腕は、確に兼好の得手なりしならむ。耶蘇は兼好の沸騰せしものか。兼好はキリストの冷却せしものか。

此の如きの兼好が宗旨は何ぞ。彼は僧俗の中間に介在して、一宗の開山となれり。老婆心宗卽是れのみ。

抑も老婆心宗の宗旨たる、圓滿に三世を觀了するに在り、苦樂は彼の拒む所にあらず、要は慰安の積を得るに存す。兼好はこれが開山として多くの檀徒を作りたるが如し。あはれ利發の兼好なるよ。吾人は彼に反く事能はず。彼は三千大千世界の旅に、最もイキなる投宿者として、「徒然」の行燈に落書を留め、斯くて大通に行旅を終れり。あはれ星霜五百歳の今、たましく、泊り合はせたる吾人の目にも、行燈の落書は宛然として見ゆるなり。

あはれ宿帳の簡略なる事よ、吾は人物を想見するに於て、之を歴史に恨まざるべからず。あはれ落書の多趣味なる事よ、吾人は風采を彷彿するに於て、之を行燈に謝せざるべからず。見すやたへなる旅泊の眺めを。長汀曲浦に離落の亭子あり。月は明かにして海濤三萬里、白馬岸を嚙んで八萬四千段、光玉亂れ飛んで急雨の如し。あはれ如何なる感興の夜ぞ。「徒然」の燈は明滅として消えず。意中の人は忸怩として逝かず。思ひ續く嚙昔の人、兼好去つて復た還らず。一穗の燈火徒らに明く、漫に物後の迹跡を照して、夜は今方に更けむとすなり。

問ふ事を休めよ前路の事、我が兼好は之を告げき。我は兼好に反く事を得ざるべし。夜は今明けたり。感興は消えぬ。即ち落書の行燈は之有り。輒ち行燈の火光は去りぬ。吾人は旅亭を起たさるべからず。今日の行旅を始めざるべからず。他の親見解を打起せざるべからず。されど、惜むべきの名殘、愛すべきの風情、之をいづこに振棄てむとせむや。

兼好の歌

あゝ兼好は酒然として去りぬ。吾人は彼を評騭せむとしたり。分つ事なかれ鳥の雌雄、我は猶我が玄の白きを知れり。如何となれば、人は到底見らるべきにあらず。知見限りありて行藏は限りなし。其動其静果して何ぞ。因縁相率くは何等の観ぞ。観の據る所は抑何ぞ。さて徒然草を讀んだ人には、又兼好の歌を讀み給へと勧めたい。兼好は歌はまづいと國學者先生は一口に云つて了ふ人が多いが決してさうでは無いからである。又彼の歌を讀むことが、頓て一層よく徒然草を解する便になるからである。

群書類從の中に兼好法師集と云ふのが出てゐる。又別に兼好法師家集と云二冊の刊本もある。それから特色の著しいのを少し引いてみる。

― さらだめがたく思ひ亂るゝ事の多きを
― あらましもきのふに今日ばかりは裁思ひさだめぬ世にし住まへば
この不安の美しさが、やがて徒然草の精神である。

心にもあらぬやうなることのみあれば
いかにしてなぐさむものぞ世の中を背かて過ぐす人に問はゞや
彼には全くこの世俗に交つて平氣で居る人が不可思議なるものに見えた。決してこの歌は誇張でも何でも無い。

後の世を歎かぬ程ぞ知られける身のうきにのみ袖は濡れつゝ
この告白は、まことに兼好其人の姿である。有難く思ふ。
山里のすまひも漸年經ぬることを

― さびしさもならひにけりな山里にとひ來る人のいとほるゝまで
さびしさに慣れるまでには随分努力を經たことがこゝに見えて居る。

人に知られじと思ふ頃故郷人の横川まで尋ね來て世の中の事とふも
いとうるさし
年經れどとひ來ぬ人も無かりける世のかくれがと思ふ山路を
されどかへりぬるあといとさうし

山里はとほれぬよりもとふ人の歸りて後ぞさびしかりける
いかなる折にか戀しき時もあり
― あらし吹くみやまの庵の夕暮をふるさと人は來ても問はなむ

かう云明かな矛盾感情を、やせ我慢せず、其儘に歌にして居る。徒然草も即ちこの同じ型の告白である。

叙景の歌として新しいのは、
あさぐもりの空もいと面白し

― 朝まだき曇れる空を光にてさやく見ゆる花の色かな
又家集に次のやうな歌が出て居る。

こよひとたのめける男のあらぬ方へまかりければ女のよませ侍りし
はかなくぞあだし契を頼むとて我が爲ならぬ暮を待ちける
うとくなり行く人につかはしける人にかはりて

人めもる中とはなしにとすればとはぬ月日のつもる頃かな

また

我が方のとだえに知りぬ外に又かけひの水のわくる心は

女につかばさむとて人のよませし

しらせばや木の葉がくれのうもれ水したに流れて絶えぬ心を

あはむといひながらさもあらざりける人につかばしける人にかはりて

たのめおく言の葉なくばあはぬ間はかほる心をなげかざらまし

とし頃たのめわたりける女のがりつかばすべき歌とて人のよませし

いつばりに我のみなまでこの葉を頼むばかりの年ぞ経にける

これ等は皆人の爲に代作したと銘打つたものである。尤もこの中には、自分の戀の歌であるのを、人の代作と云ふことにして書残して置いたのもあるかも知れぬ。彼は徒然草中にも、自分の言行を他人の言行として記してらしいものもあることは、本文に就て云つた通りであるから、さう云想像も出来る。しかし集には、自らの戀の歌も明らかにそれと端書して出てゐる。だから、この全部を假託と見ることは無理である。又これらの歌を味ふと、自らのと違つて上滑りがして、眞情が籠つてない。いかにも代作らしい。ともかく、兼好は人の戀歌の代作した、と云事は云へる訣である。

これに付いて考へ及ぶのは、かの高武藏守師直が鹽谷高貞の妻におくるべき艶書を兼好法師に書かせた、と云事である。この事に就ては實に議論考證區々であるが、ここに考證は第二

艶書代作の件

して、徒然草及彼の歌集をもととして私の頭に造上げた兼好と云人は、斯う云事をしたらうかと考へてみると、斯う答へたい、兼好は艶書の代作ぐらゐはする人である、併し人妻におくる艶書の代作をするやうな馬鹿な人では無い、と斯う答へたい。詩人には詩味だけあつて世事に對しては全く馬鹿な人がある。兼好はさうした詩人では無いのである。これは徒然草を見ても氣づく。

發端辯には、師直が、主なき女へ遣るのだと云つて兼好を欺いて書かせたかも知れぬ、と云辯護が出て居る。主なき女へやると云つたら、兼好は何心無く書くべき人であつたと思はれる。もつともこの辯護も想像の説である。

春湊浪話には、「師直の斯る不道の行をするは、足利氏の亂るべき前兆なりと心中に喜び、筆を振ひて情態を曲盡したるなり。果して師直師泰兄弟不睦にして、高氏の一族多く殺戮に遭へり。兼好と師直とは歌連歌の交あるに因りて、伊賀より折ふし往來して、京師の事を南朝に報聞し、間諜をせしならむか」と云つて居る。この辯護説は、いかにも方角違で、これでは、兼好と云人間が、くさ草紙中の人物のやうなものになつて了まつて居る。

又玉石雜誌には、當時見好法師と云者があつた。鎌倉成氏年中行事に、「正月九日初子日に相當る時は、見好法師参りて種々の祝言を申す。根松を三本持て参る云々見好法師は管領評定奉行の亭へもまかり出づる」とある。この法師が艶書の代作をしたのが紛れ傳へられたのであらう、との説が載つてゐる。こんな法師があつたかも知れぬが、これで見ると、いかにも品格の低い、萬歳然たる法師で、師直ともあらうものが、こんな奴に祕密の用を頼んだとは、どうし

でも受けられぬ話である。

一體この艶書代作と云ふことは、もと何に出でるか云と、太平記である。その廿一卷に、「鹽谷判官譏死の事」と題した項の中に、次の記事がある。

武藏守いと心を空になして、度重ならば情によわることもこそあれ、文をやりて見ばやとて、兼好といひける能書の遁世者を呼び寄せて、紅葉重の薄様の取る手もくゆるばかりに焦れたるに、言を盡してぞ聞えける。返事遅しと待つところに、使歸り来て、御文をば手に取りながら、あけてだに見給はず、庭に捨てられたるを、人目につけじと懐に入れ歸り参りて候ひぬる、と語りければ、師直大に氣を損じて、いや／＼物の用に立たぬものは手書なりけり、今日より其兼好法師是へよすべからずとぞ怒りける。かゝる所に薬師寺次郎左衛門公義所用の事ありて、ふと差出でたり。師直傍へ招きて、こゝに文をやれども、取りても見ず、けしからぬ程に氣色つれなき女房のありけるをば、いかゞすべきとうち笑ひければ、公義、人皆岩木なられば、如何なる女房も、慕ふに靡かぬものや候ふべき、今一度御文を遣されて御覽候へとて、師直に代りて文を書きけるが、なかく言は無くて、返すさへ手や觸れけむと思ふにぞわが文ながらうちもおかれず

押返して、媒この文を持ちて行きたるに、女房いかが思ひけむ、歌を見て顔うち赤め、袖に入れて立ちけるを、媒さては便あしからずと袖をひかへて、さて御返事はいかにと申しければ、重きが上の小夜衣とばかりいひ捨て、内へ紛れ入りぬ。暫くあれば、使急ぎかへりて、かくこそ候ひつれと語るに、師直嬉しげに打案じて、やがて薬師寺を呼び寄せ、

此女房が返事に、重きが上の小夜衣といひ捨て、立たれけると媒の申すは、小夜衣を調べておくれとにや、其事ならば如何なる装束なりとも、したてんするにいと安かるべし、是は何といふ心ぞと問はれければ、公義、いやはさやうの心にては候はず、新古今の十戒の歌に、

さなきだに重きが上の小夜衣わがつまならぬつまな重れそ

と云歌の心を以て、人目ばかりを憚り候者ぞとこそ覺え候へと、歌の心を釋しければ、師直大に悦びて、嗚呼御邊は弓箭の道のみならず、歌道にさへ無双の達者なりけり、いで引出物せむとて、金作の團鞘の太刀一振、手づから取り出して、薬師寺にぞ引かれける。兼好が不祥、公義が高運、榮枯一時に地を易へたり云々

とある。この外には根據が無いことである。太平記は、書き方が公平で無く、又作り事の多いことは、今は誰も認むる所であるが、こゝの如きは、殊に筆つきが空々しく、事實と云重みが少しも感ぜられぬ。

足利尊氏直義、高師直師泰、これらの人は、傳説に云如く低い人間では無い。尊氏兄弟は和漢の學に通じ、歌會も催し、康永三年十月八日には、大寶積經の摩訶迦葉會を開いてもある。この人の執事たる師直も亦典故に通じ、歌道筆道にも長じ、其詠歌は撰集にもあまた載せられてある。師直其人が、すでにこの太平記に書かれた師直とは、まるで別人である。斯う云私意の多い書に、兼好が引張り出されると云つて、直にこれを信ずることが出来ぬ。兼好といひける能筆の遁世者」とあるので、當時有名な兼好をこんな風に書く筈は無い、と疑ふ人もある

新版
繪入女訓徒然草 藤原光風女紫 同十五年
徒然之讚 各務支考 寶永八年
徒然草摘義 藤井懶齋
徒然しゆめ 十寸穂最中 享保三年
徒然草明汗稿 高屋近文 同十二年
徒然草百年精粹 僧 惠空
徒然草秘訣 僧 興隆
徒然草玉葉秘屑 同
寂寞草對硯抉抄(發端辨)谷神軒西蓮
徒然草秘抄(中に神枕抄とあり)
徒然草註解 文華堂 元文三年
繪本徒然草 西川祐信 同五年
徒然草隱解 井村信成 寶曆十年
徒然要草 僧 厭求 天明三年
徒然平林(評林の意) 手島堵庵
徒然草解
徒然草(頭註)日本文學全書第一卷、落合直文等
徒然草評釋(國文講義の内) 依田百川
徒然草講義(中等教育和漢文講義録の内) 伊藤平章

冠
徒然草抄録 島地默雷 明治廿一年
標註徒然草校本 松本愛重 同廿三年
校註徒然草 佐々木信綱 同廿五年
段註徒然草 星野忠直 同廿六年
増註徒然草 伊澤孝雄 同廿七年
つれ／＼草文段抄 鈴木弘恭訂正
校註徒然草文段抄 鈴木春湖 同廿八年
徒然草捷解 井上喜文 同廿九年
徒然草讀本 今泉定介 同三十一年
徒然草類選 大和田建樹 同三十三年
徒然草講義 井上頼文 同三十三年
標註徒然草讀本 小中村義象
註徒然草讀本(中に徒然) 織田得能
國文學佛語解釋(草あり) 織田得能
徒然草讀本(新選百科全書第七十六編) 篠田眞道註解 同四十二年
徒然草野槌(國文註釋全書第十三卷の内)同年
増補徒然草新釋 渡邊弘人
訂正徒然草新釋 内海月杖 同四十四年
徒然草評釋 藤森政次郎 同四十五年
徒然草詳解 高木 武 大正四年
新釋徒然草 高木 武 大正四年
『徒然草及兼好に就ての記事』 書齋ある書

太平記第廿一卷 吉野拾遺
正徹物語(一名徹書記物語) 僧 正徹
崑玉集 三光院豪空
和歌難波津 同
本朝遷史 林 守勝 寛文三年
兼好法師家集 同 四年
扶桑隱逸傳 僧 元政 同 年
兼好傳記 倉田松益 貞享二年
兼好略傳 篠田厚敬 元祿七年
卜部兼好傳 各務支考
兼好法師 閑 壽 寶永三年
繪入兼好諸國物語 小 永孝 正徳六年
徒然草發端 德川光圀 享保五年
徒然草片玉秘事 幾春庵利微 同 十一年
大日本史 室 鳩集 寛延三年
兼好法師傳 土肥經平 安永四年
駿臺雜話 松平定信
春湊浪話
花月草紙
犬著聞集
兼好法師集(群書類從卷二百六十九)

兼好法師傳記考證 野々口隆正
先進繙像玉石雜誌 栗原信充 天保十四年
類聚人物考 渡 明
徒然草考證 岸本由豆流
古今名家眞蹟集 明治十五年
大日本人名辭書 經濟雜誌社 同十九年
兼好事蹟(史料通信叢誌一篇、二篇) 同廿六年
兼好法師 岡田岫雲(史海三十卷) 同廿七年
讀徒然草二十首(詩) 谷楓橋
兼好と俗文學 (早稻田文學十三號)
水谷不倒 (同廿五號、廿六號、廿八號)
文學史の寛文 同 三十年
國書解題 同 同 三十年
大日本美術圖譜 佐村八郎 同 卅三年
徒然草と兼好 小杉楳邨 同 卅四年
日本佛家人名辭書 壺天禪洞 同 卅六年
大日本地名辭書 鷺尾順敬 同 卅六年
兼好が趣味論としての徒然草 内海月杖
(國學院雜誌十七卷十二號) 同四十三年

『徒然草の摸倣書、譯書、兼好傳より著想せし書』

| | | |
|------------|--------|-------|
| 可笑記 | 淺井了意 | 寛永十三年 |
| 續つれく草 | 清水春流 | 寛文十一年 |
| 犬つれく草 | 淺井了意 | |
| 小尾 | 山岡元隣 | |
| 頭眞字徒然草 | 一時軒惟中 | 元祿二年 |
| あかうそ | 淺井了意 | |
| 俗つれく | 井原西鶴 | 同 八年 |
| 兼好法師物見車 | 近松門左衛門 | 寶永三年 |
| 吉原徒然草 | | 寶永六年 |
| 飛花落葉 | 平賀源内 | |
| 徒然時勢柱 | 錦文流 | 享保五年 |
| 徒然猿 | | |
| 徒然草拾遺 | 朗 如 | 天文五年 |
| 徒然醉が川 | 兼好法師 | 天明三年 |
| つべくべ草 | 藤橋庵 | 同 六年 |
| つれく都夜 | | 同 九年 |
| 徒然吾妻詞 | 反古庵白猿 | |
| つれく草玉のさかつき | | |
| つれく草日くらし硯 | 山東庵京山 | 天保五年 |

つれく草不見世友 同 六年
新譯徒然草(漢譯) 山名彦三郎 明治廿五年
The Miscellany of a Japanese Priest
William Porter (1914) 大正三年

「語釋」及「評」索引

〔あ〕

愛敬……………七
 愛樂せられずして……………七
 愛着の道……………六
 あいなけれ……………二五
 あいなき……………二五
 あいなき……………二五
 アイヌ人……………三九
 あがきの水……………三二
 開伽棚……………三三
 飽かずむかばまほしけれ……………七
 藜のあつもの……………一六
 あかし……………一三
 吾佛……………四八
 あからさま……………四八

あからさまに……………一五、四四
 あから目……………七
 秋の鹿……………三
 秋の野の草の袂か……………六
 顯基の中納言……………六
 あきらめ申さむ……………三
 明け離るゝにやと聞き給へど……………二
 朝かれひ……………六
 淺茅が宿……………三
 あさましき……………三
 あさましき……………三
 あさましき事ども……………一
 あざむく……………四
 あし……………一
 あし……………一
 足利左馬入道……………三
 阿字……………三
 足鼎……………一
 悪しく引きて……………二
 葦の御籠……………二

阿字本不生……………五
 阿闍梨……………一
 足を空に惑ふが……………九
 飛鳥川……………七
 あせはてむ……………七
 あそび法師……………一
 あだし野……………三
 あだなる契……………八
 あぢきなきすさび……………八
 あづま……………七
 あつもの……………三
 跡つけ……………二
 あととふわざ……………六
 跡無き事……………一
 あない知りて……………八
 案内せさせて……………八
 あなるものを……………三
 あはれ……………三
 あはれと聞きしことの葉……………九
 毎に忘れぬものから……………九
 あはれも醒めて……………三

あはれとやは思ふ……………九
 相住む……………八
 あひて……………三
 遙ひ見る……………八
 あふさきるさに……………八
 賽かけわたして……………三
 あぶらつき……………七
 押領使……………二
 雨おほひの毛……………八
 尼ごぜ……………三
 雨夜品定……………二
 あまりに物騒がし……………六
 雨もぞ降る……………六
 明障子……………六
 怪しうこそ物ぐるほしけれ……………一
 あやしき……………一
 あやしき物……………二
 あやしの……………三
 綾小路ノ宮……………三
 隈たす……………三

あやまち 四七
 葛蒲葺く頃 四
 あら／＼しく 八二
 あらえびす 三九〇
 あらがび 三六一
 争ひ憎み 三六
 あらぬ道のむしろ 四七
 あらまし 四七
 あらます事ども 四七
 あらまほし 四七
 あらまほしき方 三
 あらめ 九〇
 阿羅漢 三〇五
 在られけるよ 三六
 あられぬ 一六三
 有難き 一四九
 有難きものぞ 二九一
 有難く 一〇四
 在兼卿 五八三
 有柄川 三二一
 ありたき事は 八
 ありつる 一五三
 有宗入道 五五三
 有るか無きかに 一六
 有るに従ひて用ひよ 二〇
 あるにも過ぎて 二〇二

青き眼 四三
 安喜門院 二九二
 安居院 一三九
 暗證の禪師 四九一
 あんなり 四六
 安樂 五九
 優 六七、九七
 有職 九
 有職の人々 九
 いか侍らむ 三六二
 いかかばせむ 三〇九
 いかに仰せらるゝやら 二八九
 如何にぞや 四三
 生きのぶる 三三三
 勢猛に 六
 息巻きて 二九〇
 生けるもいたづらなら 四三〇
 す 四三〇
 いさかひて 四七

[い]

いざたまへ 七六
 いさましからむ 一六二
 いさや 四
 異常記憶 一九九
 衣裳にたきものす 二六
 伊勢 六八
 磯の禪師 五四
 板倉勝重 三〇
 板敷を下げ 三〇
 いたつかはしく 八二
 いたづらに 二二
 痛ましうするものか 九
 痛ましからざらむ 二四二
 いたむ人 四二
 一期 一七
 壹越調 四二
 一言芳談 二六八
 一定 二五
 一條室町 三九
 一度せさせよ 二四
 一部とある草紙 二二
 一念 一九七
 一年の相 一八三
 一念の念佛 二六〇
 一上 三三

一の人 五
 一切經 四八
 一雙 一八五
 一生精進 二四一
 五緒 一八四
 出雲 五七
 いづれの人と 九〇
 一鉢のまうけ 一六三
 出で合へば 二四
 いでや 三
 いとかなき子 一七
 糸によるものならなく 四三
 いとも 一六一
 いと若き 一五
 稲葉 二六
 古のあふひと人は 三八二
 古の聖の御代 一〇
 命あるもの 三三
 命長ければ 三三
 岩倉 二九一
 石清水 一四三
 言ひ出づれば 四三
 云ひ入れ佇みたる 二七
 云ひかなへたり 四三
 言ひ消たれ 四七

いひつけたる 二九
 云ひ定めて 三二
 云ひしろひて 一五
 言ひひろめてなす 二九
 云ひ紛へ侍れば 二九
 いひわたりけれども 二七
 いぶせく 四〇八
 家長が日記 四
 家に生れ 一〇八
 家の集 三六〇
 家居 三〇
 今出川 三九
 今出川のおほい殿 三二
 今出川院近衛 一九一
 今更斯くやは 一〇五
 今更の人などのある 二九
 今少し 九七
 今の内裏 九
 今の代の 八
 今めかしく 三二
 今も見送り給ふとか 二八三
 いみじ 五
 いみじけれ 三
 いみじと思ひては語ら 一六
 じ 一六

忌みて 六八
 芋頭 一七五
 いもねす 二八
 いらなく 一五
 入り立たぬ様 三三
 入り立つ 三三
 入れ申さるゝ 四四
 色濃く 三七〇
 色めきたる方 三〇九
 色も無く 三七八
 倚廬 八三
 色ふし 四八
 いろふべき 二七
 色を思ふが故なり 二八
 印 一五
 因果の理 四七

[う]

受けられぬ 二八
 有情 三三
 うしろ手 四三
 うすもの 三三
 嘯き歩き 一七
 疑ひながらも念佛すれ 二五
 ば往生す 二五
 歌屑 四
 うたて 一〇八
 うたて思ふ所無く見ゆ 一〇
 訴 二八
 哥枕 四
 宇治 二四
 うちあはび 三三
 うちある調度 三三
 打出づ 三六
 うち／＼の儘 四〇
 うち／＼の儘 四〇
 うちおほひければ 三三
 うちさ／＼めく 二八
 宇治大路 二四
 うちおほめき 二四
 宇治左大臣殿 四三
 内田魯庵氏の談 二四
 打解けたる 二八

うづくまりて 一三七
 うつし心無く 二四
 うつ／＼なし 三〇
 うつはもの 一六
 太秦殿 三三
 うつるべからず 三三
 移ろふ 七六
 禹の行きて三苗を征せ 七六
 しも 四三
 優婆夷 二八
 優婆塞 二八
 上少し 四一
 馬乗 四七
 梅の匂 五
 梅宮 七
 うや／＼しく 一九
 うらなく 三
 古文 四三
 うらみ申さばや 三三
 うら／＼かに 五七
 うるさし 一〇
 うるはしき 四
 嬉しと思ひて 一五
 愁へ 一〇
 憂を忘る 四八

飢を助け……………一六三

〔え〕

得難き寶をたふと
ます……………三七五
得こそ聞き知られ……………二八九
得去らぬ事のみ……………一七一
得ならず……………一三六
得ならぬ……………二六、三三
夷……………三三
葉の入りて……………二〇〇
得も云はぬ事ども……………四七
衣紋……………二九
緑……………二五
宴飲聲色……………五〇
延喜式……………一〇一
延政門院……………一八二

〔お〕

老……………一三
老の方人……………四九
應長……………一八
大町桂月氏……………九
おきて……………三〇一
後れて……………三七
おける……………五
行を潔くして……………四九
起りて……………二五、三三
遅櫻……………三三
オットーワイニング
ル……………二〇
大人しき人は……………三五
おとなしく……………三七
おとなしく戻きぬべく
もあらぬ人……………四〇
おと矢……………二七
おどろくしく……………四三
同じくは……………一七〇
同じやうにもあらぬ
な……………二二三
各……………一八
おのれ……………三三
おのれらしも……………一四
追風用意……………二七
追ひたりければ……………三三

御佛名……………五
追ふものか……………三三
覺劣り……………三三
覺えしか……………六
覺えず……………三
覺えげ……………三七
大方……………四〇
大方ば……………三
多かめれ……………三
大口……………九
思し出づる所……………六
おぼしき事……………五
おほし立つべし……………三
おほす……………三
大鷹……………四
大路の様……………六
おぼつかなき事……………三
おぼつかなき様……………三
おぼつかなくこそ……………一
多久資……………五
大原野……………七
大原の里の飯……………一
大みぎり……………一
おほやう……………一
公の奉り物は……………一
大社……………一

大井川……………一
御前にて切らるゝ……………三
御室……………一
おもかげ……………一
『思ひ出づや』の歌……………一
思ひ入りたるさま……………一
思ひおきてむ……………一
思ひくたす……………一
思ひ立つ日……………一
思ひたらず……………一
思ひ寄らぬ……………一
思ふ所無く見ゆれ……………一
御湯殿の上……………一
及びがららず……………一
およすけたる……………一
下り居させ給ひての
春……………一
疎か……………一
御曹司……………一
御鷹飼……………一
陰陽道……………一

〔か〕

江侍従……………三
江師……………四
かいともし……………六
かいどり姿……………四
かいもちひ……………三
高運……………五
拷器……………九
柑子……………六
好事を行じて……………七
行成……………七
行成大納言……………七
強盗法印……………一
高名……………一
高名仕らむ……………一
高名の木のぼり……………一
高野の大師……………一
高良……………一
高欄……………一
亢龍の悔……………一
かき……………一
かきすさびたる……………一
かきつくまゝに……………一
書きも寫してむ……………一
かきもて來つ……………一
學匠……………一
學匠を立てず……………一

覺悟す……………五
神樂……………八
かくれども甲斐なきも
のは……………八
かけす……………八
懸けて……………八
算……………八
景茂……………八
かけもの……………八
勘解由小路の家……………八
勘解由小路の二品禪
門……………八
かげろふ……………八
かことがましく……………八
賢きより賢きにも……………八
かしこし……………八
頭を打ちあてられにけ
り……………八
春日……………八
霞立つ長き春日の……………八
風も吹きあへず……………八
かたくな……………八
かたくななる筆やうし
て……………八
形ありさま……………八
形に恥づる所もあれ
……………八

ば……………一
かたほ……………一
かたほとり……………一
肩ぬぎて……………一
片端言ひ交はし……………一
かたはらいたく……………一
語らひて……………一
片田舎……………一
加持香水……………一
かちより……………一
かつ……………一
桂の木……………一
看督長……………一
かなぐり散らして……………一
かなし……………一
かなでて……………一
かなばて……………一
必ずとせば……………一
兼行……………一
かの惑ひの一つ……………一
かばかり……………一
河竹……………一
飼はむとて……………一
かはゆし……………一
飼ひつけて……………一
貝をおほふ人……………一

樂府……………一
可不可は一條なり……………一
甲香……………一
かふし形……………一
かへし刀五分に切る……………一
顔うちさゝけて……………一
鵝毛……………一
鎌倉中書王……………一
蒲冠者……………一
上さま……………一
上下はづれ……………一
紙の衾……………一
紙ひねり……………一
冠桶……………一
龜菊……………一
龜山殿……………一
賀茂……………一
賀茂の岩本橋本……………一
賀茂の競馬……………一
鳴の長明……………一
から……………一
乾蛙……………一
唐櫃……………一
唐橋中將……………一
唐瓶子……………一
狩衣……………一

假の宿り……………三
 かりや……………四〇
 乾きすなご……………四六
 漢……………三六
 顔回……………三四
 神さびたる……………六五
 甘心……………三三
 上達部……………三三
 神無月……………三四
 堪能……………三五
 閑院殿……………九

[と]

菊亭の大臣……………一九
 奇怪……………五七
 閉きをよろこぶ……………一九
 機嫌……………四〇
 歸座……………五〇
 起請文……………五〇
 鬼神は邪無し……………五五
 『奇蹟』……………二四
 きてく……………二四

北の屋かげ……………二六
 北山太政入道殿……………三五
 北山入道殿……………三三
 秘杖……………四九
 奇特……………二〇
 きぬかつき……………一六
 木の道のたくみ……………六
 際……………五
 きばまりて……………三九
 極むる司位……………一八
 牙を噛み出だす……………四七
 貴船……………七〇
 きほひ……………三七
 氣味深き……………四三
 肝心も失せて……………二五
 規模……………二七
 行願寺……………二五
 京極殿……………七
 京極入道中納言……………三六
 京極の屋……………三六
 京白川……………一八
 行跡……………五九
 行仙房……………二八
 行宣法印……………五〇
 行法……………四九
 格式……………三九

許由……………五〇
 擬當……………四七
 興宴……………三九
 魚道……………四七
 虛妄……………三三
 清水……………三二
 清行……………四一
 きら……………四八
 きらめきたる……………三九
 切り落しつ……………二四
 切杖……………二九
 切り損ぜられて……………二六
 騙を學ぶ……………三八
 祇園精舎の無常院……………五五
 公明……………二九
 近習……………二七
 近代艶隠者……………二六
 禁秘鈔……………二
 公世……………二九

[く]

究竟……………五五
 くぐもり聲……………四七
 供御……………三三
 くさめ……………三三
 公事……………九
 楯形の穴……………一〇
 薬玉……………三八
 曲者……………四八
 具足……………八三
 九體……………七五
 くだもの……………四〇
 くだなし原……………四四
 口にさし當て……………四七
 くちばみ……………二六
 口つきの男……………二四
 口惜し……………五
 口惜しうこそ……………二八
 春のはな……………一八
 九條相國伊通公……………五八
 九條太政大臣……………一八
 九條殿の遺誠……………一〇
 口傳……………四二
 公人……………五〇
 九品の念佛……………三三
 くま……………三〇
 限無き……………三六

くまなくばあらぬに……………二六
 久米の仙人……………二六
 公物……………二七
 雲井……………三六
 暗き人……………四九
 くらぶの山も……………五九
 鞍馬……………五〇
 苦しからぬ事をも……………二九
 苦しからぬにや……………一八
 栗栖野……………三
 車の前……………一八
 車もたげよ……………六五
 吳竹……………五〇
 黒戸……………四四
 黒み棚……………三三
 廻體……………五七
 光明眞言……………五九
 荒涼……………四一
 過差……………二七
 歎狀……………五八
 火爐……………五八
 貫……………一七
 管絃……………九
 元日の奏賀の聲……………三五
 寛大……………二九
 勸農詞……………三一

[け]

灌佛……………二〇
 願文……………二〇
 嵯康……………三
 稽古……………五
 警蹕……………五〇
 經營……………四六
 教相……………二二
 けうとき……………八九
 希有にして……………二五
 希有の童……………三二
 孝養……………三九
 樂欲……………二九
 堯蓮上人……………三八
 氣歴さるゝこそ……………八
 氣おされて……………三三
 外記……………二七
 外相……………四六
 氣色覺ゆるばなし……………四三
 けしきだつ……………三三
 下乗……………四〇

げす女……………二八
 懈怠……………二六
 解脱上人……………二六
 結縁……………三六
 げにげにし……………一〇
 實にと聞く甲斐あるも……………一〇
 のから……………三
 實には……………三
 けのあがる病……………三三
 けはひ……………二七
 けはれなく……………四八
 けやけ……………三八
 下蒔……………二九
 玄輝門院……………九
 幻化……………二
 言志録……………三七
 劔璽内侍所……………八〇
 玄上……………一九
 沅湘日夜……………三
 賢助僧正……………五
 阮藉……………四
 建治……………四七
 顯密の僧……………四三
 建禮門院の右京大夫……………三三
 元應……………一九

[こ]

小板敷……………六
 弘安……………四七
 困じにたれ……………一五
 後生を恐る……………五三
 弘融僧都……………三二
 五葉……………一八
 御幸……………五三
 久我相國……………二七
 久我内大臣殿……………四九
 久我繩手……………四九
 金は山に棄て……………一〇
 濃き……………二六
 故郷の扇を見ては悲……………三三
 ひ……………三〇
 五逆……………三〇
 虚空……………五七
 極樂寺……………四三
 苔の袂にやつれ……………四九
 苔の細道……………三三
 苔のむしろ……………三三

| | | | | | | | |
|------------|-----|------------|----|---------|----|------------|----|
| 心地ぞすべき | 二 | 心ざま | 八 | 御所さま | 八七 | 事様 | 三 |
| 九重 | 六五 | 心知らぬ人に | 二九 | 期する所 | 二八 | 事さめて | 三 |
| 近衛關白殿 | 四三 | 心づかひ | 四七 | 後世知らぬ人 | 一六 | ことそぎ | 四八 |
| こゝもとに | 二九 | 心づかひせらるゝ | 二九 | 後世を願はむに | 一六 | ことなる事なき | 四八 |
| こゝもとの浅き事 | 一六 | 心づきなき事 | 四三 | 小袖 | 四八 | ことにうち出でて | 三九 |
| こゝを切れ | 二 | 心とときめき | 四八 | 五大戒律 | 三〇 | 事にもあらず思へど | 三四 |
| こゝら | 三五 | 心にくし | 二六 | 小鷹 | 四三 | 事に觸れてうちある様 | 三四 |
| 心あらむ友もがな | 三七〇 | 心にとりもちては | 三 | 木魂 | 四〇 | にも人の心を惑はし | 二六 |
| 心あわただし | 八八 | 心は縁に引かれてうつ | 四七 | こちたく | 三三 | 事の寄せ | 四四 |
| 心得ず思はする | 二九 | 心は付くめれ | 六二 | 御聴聞所 | 六五 | 異様 | 四四 |
| 心得たる由のさしいら | 二二 | 心ばへ | 二七 | 骨 | 四〇 | こなた | 二八 |
| 心得たるどち | 二二 | 心深う | 二九 | 五條の内裏 | 四二 | この木無からましか | 二八 |
| 心得ぬ | 四四 | 心細からぬか | 二九 | 五條の天神 | 四八 | この國 | 四二 |
| 心おき | 一〇五 | 心まさりて | 二二 | ことうけ | 三六 | この心を得ざらむ人 | 四二 |
| 心おくれにして | 三五九 | 心もとなく候 | 三三 | 事行へる | 三六 | この理を知らざるな | 三七 |
| 心劣り | 三九 | 心を盡して磨き立て | 三三 | 事缺くまじ | 三四 | に | 二八 |
| 心劣りせらるゝ | 七 | 御相傳 | 二八 | 後徳大寺の大臣 | 三 | 此頃やう | 五二 |
| 心すべき | 二四 | 小坂殿 | 三 | こととふすが | 九〇 | 此程の事 | 二八 |
| 心にくきもの | 二四 | 來し方 | 三 | ことぐさ | 四 | 御坊 | 二四 |
| 心にくし | 一四 | 飯落す | 一八 | 事々しく | 一五 | こはき | 四八 |
| 心の儘ならず作りなせ | 一五 | 後七日 | 一八 | ことぐさ | 四 | 木幡 | 二四 |
| るは | 三 | 故實の諸官等 | 二七 | さだめ合ひ | 一五 | 小春 | 二〇 |
| 忘人に勞を施さじ | 三四 | 小じとみ | 六 | さだめ合ひ | 一五 | | |
| 志をも奪ふべからず | 三五 | 御所 | 一五 | | | | |

[20]

| | | | | | | | |
|------------|-----|---------|-----|-----------|----|------------|----|
| 古弊 | 二七 | 才覺 | 四九 | ざえ無くなりぬれば | 八 | 定め合へる | 一七 |
| 護摩 | 四九 | 齋宮 | 六七 | 嵯峨 | 三一 | 定め無きこそ | 三 |
| 狛犬 | 五七 | 最勝講 | 六五 | さがなき | 五八 | さてうちおきたるは | 三 |
| 小松の帝 | 四四 | 最勝講奉行 | 一三四 | 相模守時頼 | 四三 | さてもはや長らへ住む | 三 |
| 籠りたる | 四七 | 最上のやう | 二六 | 盃の底 | 四七 | べき | 三 |
| こよなう | 三 | 西大寺 | 四〇 | さかゆく | 二四 | さながら | 一七 |
| 今宵ぞ安きいば | 二八一 | 西明寺 | 四〇 | 咲き合ひて | 三三 | さながら心にあらず | 二四 |
| 惟繼中納言 | 二四 | 最明寺入道 | 四九 | ささちやう | 四九 | 早苗取る頃 | 五 |
| これらに無き人ことに | 四四 | さい王丸 | 三二 | 咲きぬべき程の梢 | 三六 | 讃岐典侍が日記 | 四六 |
| これらにも | 四四 | 西城傳 | 三二 | 前中書王 | 一七 | さのみ | 三三 |
| これらの人 | 四九 | 西園寺 | 一三 | 作文 | 九 | さは云へど | 八九 |
| 茲を念ふこと茲に在ら | 三 | 西園寺内大臣殿 | 一三 | 左近の櫻 | 五〇 | さばかり寒き | 六 |
| ざる | 三六 | 相 | 四〇 | 佐々木隠岐入道 | 三三 | さばかりならば | 一三 |
| 御論議 | 五五 | 草 | 三九 | 敏き時は則ち功あり | 四四 | さばかりにこそ | 一三 |
| 聲をかしくて | 五五 | 早歌 | 三九 | さよやかなる | 四七 | 相府蓮 | 三 |
| 権化の人 | 九 | さうくし | 四七 | さしてよ | 二六 | 雜人 | 一八 |
| 坤元録の御屏風 | 三九 | 造作 | 二五 | 指貫 | 二八 | 侍 | 一八 |
| 権者 | 七一 | 相者 | 一五 | させること無き事 | 二六 | さへられて | 四七 |
| 金堂 | 七四 | 雙調 | 三九 | 誘ふ水あらば | 二八 | 様悪しくも | 三六 |
| | | さうなきもの | 三二 | 沙汰ありて | 四四 | 様悪しき事 | 三七 |
| | | さうなく | 三二 | 沙汰し置きて | 四四 | さもあらむかし | 三七 |
| | | 相人 | 三九 | さだめ合はれけり | 二九 | さらすともど | 三七 |
| | | 翰卷 | 四四 | さだめ合はれけり | 二九 | 更なり | 三七 |
| | | 相論 | 四三 | さだめ合ひ | 一五 | 更に | 三七 |
| | | 才ある人ば | 一七 | | | さらばひて | 四六 |

| | |
|------------|-----|
| 佐野 | 五八四 |
| 去り難く | 一七〇 |
| さる方にあらまほし | 一六六 |
| さるからさぞ | 一六六 |
| さる事ぞかし | 一六六 |
| さるば | 一三九 |
| さるべきにや | 一三九 |
| さるべき日 | 九〇 |
| さるべき故ありとも | 二二七 |
| 去る者は日々に疎し | 一八九 |
| されば | 一六〇 |
| さわく | 一六〇 |
| 山澤に遊びて | 一六〇 |
| 三塔順禮 | 一六〇 |
| 三味僧 | 一六〇 |
| 山門 | 一六〇 |
| 三里 | 一六〇 |
| 秀句 | 一八三 |
| 修中 | 一八三 |
| しかじかの事はあなか | 一八 |
| しこ | 一八 |
| しかくの宮 | 一七〇 |
| 然るべからず | 一三九 |
| 式 | 一三九 |
| 色説 | 一三九 |
| しきみ | 一三九 |
| 四季の物語 | 一三九 |
| 色欲には如かず | 一三九 |
| 自讃 | 一三九 |
| 時間の富豪 | 一三九 |
| 獅子狛犬 | 一三九 |
| 時正 | 一三九 |
| 詩序 | 一三九 |
| 史書 | 一三九 |
| しじら藤 | 一三九 |
| 次第 | 一三九 |
| 絲竹 | 一三九 |
| 承仕法師 | 一三九 |
| 紙燭 | 一三九 |
| しそへ | 一三九 |
| 子孫おはせぬぞ | 一三九 |
| したよめ | 一三九 |
| 自他の要事 | 一三九 |
| したり顔 | 一三九 |
| 榻 | 一三九 |
| 七歩の詩 | 一四〇 |
| 仕丁 | 一四〇 |
| 使懸 | 一四〇 |
| 七徳の舞 | 一四〇 |
| 四重 | 一四〇 |
| 慈観 | 一四〇 |
| 失 | 一四〇 |
| しづ | 一四〇 |
| 四條黄門 | 一四〇 |
| 實有の相 | 一四〇 |
| 静まりて | 一四〇 |
| 静まる | 一四〇 |
| 四條大納言 | 一四〇 |
| 四條大納言隆親卿 | 一四〇 |
| 菰の間 | 一四〇 |
| 品形 | 一四〇 |
| しなし | 一四〇 |
| しな無く | 一四〇 |
| 信濃前司行長 | 一四〇 |
| 品の高さ | 一四〇 |
| 指南 | 一四〇 |
| 死にさまに | 一四〇 |
| 忍びたるけはひ | 一四〇 |
| 忍びて寄する事ども | 一四〇 |
| しのぶの浦の蟹のみる | 一四〇 |
| めも | 一四〇 |
| 柴 | 一四〇 |
| 四方拜 | 一四〇 |
| しばしとやはいふ | 一四〇 |
| 椎柴 | 一四〇 |
| 集 | 一四〇 |
| 拾芥抄 | 一四〇 |
| 四部の弟子 | 一四〇 |
| しへたぐる事 | 一四〇 |
| 鹽 | 一四〇 |
| 沙垂れて | 一四〇 |
| しめやかに | 一四〇 |
| 下人 | 一四〇 |
| 下法師 | 一四〇 |
| 下無調 | 一四〇 |
| しもと | 一四〇 |
| 死門 | 一四〇 |
| 生 | 一四〇 |
| 浄衣 | 一四〇 |
| 上氣 | 一四〇 |
| 上卿 | 一四〇 |
| 聖光上人 | 一四〇 |
| 聖教 | 一四〇 |
| 相國 | 一四〇 |
| 性骨 | 一四〇 |

[]

| | |
|------------|-----|
| 常在光院 | 一八三 |
| 生死 | 一八三 |
| 障子 | 一八三 |
| 生死の相にあづから | 一八三 |
| す | 一八三 |
| 生死を出でむと思はむ | 一八三 |
| に | 一八三 |
| 盛親僧都 | 一八三 |
| 勝絶調 | 一八三 |
| 請ぜられむ | 一八三 |
| 常住 | 一八三 |
| 生住異滅 | 一八三 |
| 聖徳太子傳の一節 | 一八三 |
| 浄土宗に恥ぢず | 一八三 |
| 浄土寺前關白殿 | 一八三 |
| 生佛 | 一八三 |
| 城介義景 | 一八三 |
| 城陸奥守泰盛 | 一八三 |
| 生の樂 | 一八三 |
| 靜然上人 | 一八三 |
| 情欲 | 一八三 |
| 上藤 | 一八三 |
| 聖靈會 | 一八三 |
| 正和 | 一八三 |
| 庄園あまた寄せられ | 一八三 |
| 生を隔て | 一八三 |
| 生を食り | 一八三 |
| 沙門 | 一八三 |
| 赤舌日 | 一八三 |
| 社參 | 一八三 |
| 謝靈運 | 一八三 |
| 終焉 | 一八三 |
| 衆議判 | 一八三 |
| 首夏の悲哀 | 一八三 |
| 宿河原 | 一八三 |
| 宿執開發の人 | 一八三 |
| 殊勝 | 一八三 |
| 出仕して | 一八三 |
| 入塵 | 一八三 |
| 修理 | 一八三 |
| 俊乘房 | 一八三 |
| 順徳院の | 一八三 |
| 證空上人 | 一八三 |
| 乘願房 | 一八三 |
| 細床 | 一八三 |
| 稱名 | 一八三 |
| 勝利 | 一八三 |
| 食は人の天なり | 一八三 |
| 食品 | 一八三 |
| 所課 | 一八三 |
| 所願皆妄想なり | 一八三 |
| 所化 | 一八三 |
| 所見なし | 一八三 |
| 諸司 | 一八三 |
| 書寫の上人 | 一八三 |
| シヨベンハウエル | 一八三 |
| 白樫 | 一八三 |
| 白柏子 | 一八三 |
| しらぼし | 一八三 |
| 知りたる事とて | 一八三 |
| 事理もとより二なら | 一八三 |
| す | 一八三 |
| しるし | 一八三 |
| しるしあらむ | 一八三 |
| 知る所 | 一八三 |
| 首楞嚴經 | 一八三 |
| しれたる | 一八三 |
| しろうるり | 一八三 |
| 白き絲の | 一八三 |
| 白くせよ | 一八三 |
| しわたして | 一八三 |
| 慈惠僧正 | 一八三 |
| しをみつきたる | 一八三 |
| 死をやすくして | 一八三 |
| 信 | 一八三 |
| 心戒 | 一八三 |
| 神供 | 一八三 |
| 信願 | 一八三 |
| 眞言院 | 一八三 |
| 人事 | 一八三 |
| 眞乘院 | 一八三 |
| 神泉苑 | 一八三 |
| 神仙調 | 一八三 |
| 眞俗 | 一八三 |
| じんだ瓶 | 一八三 |
| 新太縣少將 | 一八三 |
| 寢殿 | 一八三 |
| 神妙 | 一八三 |
| 信も起さず | 一八三 |
| 人倫 | 一八三 |
| 新院 | 一八三 |
| 信をも守らし | 一八三 |
| 透垣 | 一八三 |
| すかし | 一八三 |
| すかれて | 一八三 |
| 過ぐる | 一八三 |
| 典侍 | 一八三 |
| 資季大納言入道 | 一八三 |

[す]

資朝卿……………四〇五
 すける方……………三七〇
 すしかこつ方も……………四九
 少し心あるきは……………一七一
 数献……………五三〇
 すさび……………八三
 すさまじ……………二九四
 すさまじきもの……………五
 すさまじく……………四七一
 涼しかりけむ……………五
 壽々葉羅井……………二五
 すゞろなる人……………五七三
 すゞろに……………四三〇
 簾張り出でて……………三七一
 すぢりたる……………四七
 ストリントベルヒ……………四〇
 簀子……………三
 周防内侍……………三七九
 すべき方の無ければ……………三七七
 すべる……………四八九
 住み果つる……………二
 住吉……………七〇
 する事にてありしこそあはれなりしか……………五
 するすみ……………三九一

水干……………五七
 水石……………三七七
 末々……………九〇
 末通らす……………二五
 末葉……………四
 据ふ渡す……………一七
 寸陰……………二九七

[せ]

清閑寺僧正……………四三〇
 清猷公……………四三七
 政事要略……………五〇三
 西宮……………五〇〇
 清暑堂の御遊……………一九四
 招魂の法……………五〇
 小節……………三〇六
 世諺問答……………五〇六
 刹那の懈怠……………二五九
 是法……………三三六
 せむ方無き……………八五
 善業……………四一五
 前後も知らず……………四四五

善根を焼くこと火の如くして……………四九
 前栽……………三
 『戦争と平和』……………三五
 先達……………一四四
 禪定……………四一五
 先途……………二〇九
 全否定……………二六七
 千本の釋迦念佛……………一
 千本の寺……………五八
 宣命……………二七
 禪林の十因……………二五

[そ]

増賀聖……………六
 族絶えむこと……………一九
 惣門……………二六
 息災……………四四
 續飯……………一九五
 そこ／＼に……………二八
 そこはかとなく……………一
 そこばくの……………四七

そほどにてぞありけむ……………一九
 そのかし……………一五
 そろこと……………三六
 そろ言……………五七
 そろに……………二〇
 卒爾にして……………四一五
 卒都婆……………九〇
 其の家……………三五
 其のかたとて残りたる……………七五
 そのきは……………八九
 其事……………一五七
 其の事かの事便宜に忘るな……………四
 其事と無く……………二七
 其人の文法……………一九
 其の事待たむ程あらじ……………一七〇
 周別當入道……………五
 染紙……………六八
 染殿の大臣……………二〇
 そも……………一四
 空だきもの……………二七
 空の名残のみぞ惜しき……………六一

それもさるものにて……………五
 それより下つ方は……………四
 孫晨……………五

[た]

攤……………四一四
 大覺寺殿……………二七八
 太鼓の章……………二九六
 大衆……………三〇
 太子……………五五
 大事……………一七〇
 大師勸請の起請文……………五二〇
 大將……………三四一
 太衡……………四三
 大臣の大饗……………四三
 大納言法印……………二五三
 大福長者……………五三三
 退凡……………五〇四
 題目……………五八二
 大門……………七四
 大理……………二四
 導師……………三七

道志……………四八
 堂上……………二七六
 道心……………一六二
 道人……………二九七
 道心者……………一七
 當代……………五二
 道場……………三二五
 桃李ものいばれば……………七一
 高倉院の法華堂……………三六
 高橋氏文……………三四
 高造戸……………六
 薪にくだかれ……………九
 田口醫學博士……………三〇
 たくみ……………三、四九一
 たけき河……………四一〇
 竹谷……………五七
 竹の園生……………三
 大極殿……………三五
 たしなみ……………四七
 助けよや猫また……………二五
 唯云ふ詞……………六
 叩く……………五
 ただ其折のこゝちすれ……………六
 唯人……………五
 忠守……………二七九

立明し……………六
 立歸り……………五
 立込みたり……………三九
 立ち去らでのみ……………三
 立ち寄り……………三七〇
 龍秋……………四一
 達人……………四九
 たつみ……………四九
 たてあげ所せげなる……………二八
 七夕祭る……………四
 多能は君子の恥づる所なり……………三九
 樂しき人……………二七
 頼みて……………一九
 頼もしう……………三七〇
 たばかり……………二九
 たはれたる……………二
 旅のかりや……………一九
 平宣時朝臣……………三九
 堪ふべくもあらぬわざ……………六
 たべて……………三八
 玉垣……………六
 玉だれに後の奏は……………三六
 玉造……………四一
 玉の盃……………二

玉乗……………二〇
 魂祭……………四
 爲兼大納言入道……………四〇
 爲則……………三二
 たやすからす思はれむこそ……………三
 たやすからぬ道……………三四
 たゆみ給へる……………二八
 便り……………三一
 便り悪しく……………八
 たよりにふれては……………一
 便よき所……………一五
 たるにつけて……………六
 誰かし……………四八
 垂籠めて……………三六
 たわゝに……………三
 談義……………一七
 耽美派……………二
 檀那……………四七
 短慮の至り……………五

[ち]

柱：一九五
 中陰：八七
 中宮：三三
 住する：二五九
 住持：三八九
 中門：一七、五二
 近づかまほしき人：四二
 力なきことなり：一九三
 力も無く：二五二
 持經：二六九
 軸：二二二
 畜生残害：二四二
 軸につけ表紙につく：二六五
 竹林院入道左大臣殿：二二五
 畜類：一六四
 ちこ：一三三
 地獄に墮つべし：四九
 智者：一七五
 チトヌス：二四
 持拂堂：二〇一
 廳：二四
 定額：二五〇
 廳屋：二七四
 丈六：七五
 著せざる：二四六

着陣：二七六
 勅勸：二七
 持來：四六
 座塚：二〇一
 智恵出でては：二〇
 地を引く：五五
 陣：六七
 圓：二四
 衡重：一三
 つい立ちて：一七
 築土：四八
 ついでをかしきやうに：二五
 つい居ける：一七
 ついてゐて：一八
 通：二七
 通號：五〇
 塚：五五
 つかの間も：一五
 つかむとする：四〇

つき鐘：二六三
 次様の人：一六
 盡きすまじけれ：二六
 つきくし：三、四
 つきたる：三〇
 月ばかり：六三
 月見るけしき：九七
 月をめで花をながめし：一九〇
 筑紫：一九二
 つくくしと：三三
 作り立つ：二八
 作り果てぬ所：三三
 作り磨かせ：七
 着くる枝：一八
 つくろひけれど：二二
 つたなき：四九
 土大根：一九
 土御門相國：二〇
 つまむに：二二
 恒の産：二九
 つばもの：三三
 兵の道：三三
 つばる：四一
 局：四一
 つまむ合はせて：二〇

妻戸：九七
 艶消：二四
 つやく：一五
 つゆおとなふ者なし：三五
 露遣はざらむと對ひ居たらむば：三七
 鶴岡：五三
 鶴の大殿：五二
 つれづれも無く：四九
 つれづれも無く：四九
 連れて：五〇
 追儼：五七
 手足はだへなどの：二七
 調度：三二
 手書く事：三八
 手習：八三
 手馴れし具足：八四
 手箱：二六
 寺法師：二四
 手をすりて：二四

[と]

天狗：三〇四
 殿上人：二二五
 顛倒の相：九〇
 天王寺：二四四
 とありかゝり：三七二
 冬月：五二
 冬至：四三〇
 東寺：四〇七
 東寺の若宮：四九
 開許：一四〇
 東首：三五五
 藤大納言殿：三五三
 東大寺の神輿：四九九
 東二條院：四九九
 とうよ：六七
 登蓮法師：四七六
 洞院右大臣殿：二七七
 洞院左大臣殿：二三五
 咎：二五九
 とかくすれば：一四六

梅尾の上人：三九五
 時：一七
 時移り事去り：七一
 土器：二六
 時の間の煙：三三
 常盤井相國：二六
 時をもわかす：二六
 徳川家康：二六
 得失無く：二六
 得失止む時無し：二六
 徳大寺右大臣殿：二六
 徳人：二六
 徳をつく：二六
 所定めず：二六
 所狭き様：一〇
 所狭く：三三
 所無く：三三
 床屋の教：三三
 所より：三三
 年頃もあればこそあれ：四三
 泥鰌の歌：一七〇
 調へ知れる人：三九
 舍人：三九
 殿ばら：五七
 主殿司：二七

殿守のとものみやつこ：八一
 主殿寮：二五
 問はず：三〇
 問はず語りに：二九
 鳥羽殿：三三
 鳥羽の作り道：三三
 問はれむ程の事：二六
 扉：二七
 とふらふ：二六
 遣き物を賣とせず：三三
 ともある毎に：四四
 具氏宰相中將：三六
 どもなど：一五
 とよまる：一五
 取りしたゞめ：一五
 取附きながら：二八
 鳥部山：二二
 取分きて：四一
 頼阿：三九
 遁世の僧：二四

内記：二六
 内外の文：二二
 内侍所：二七
 内證：四六
 内府：四六
 内辨：二七
 内たる：二九
 中垣：三三
 中子：二六
 なか：二六
 なか：二六
 なか：二六
 方もありなむ：二六
 中空：四八
 長月ばかりに：一八
 無きに事缺けぬやうな計らひて：二九
 亡き人の：二九
 亡き人の別よりもまさりて：二九
 歎きも喜びもありて：二九
 なげし：二六
 なごり：二六
 なさけなう：二六
 なさけなし：二六
 なじかは捨てし：二六
 謎：二六

なぞなぞ……………二七九
 なでふ事かあらむ……………四六三
 など……………三〇六
 などや……………三〇六
 何阿彌陀佛……………二五〇
 某といふ世捨人……………六二
 何かば……………八九
 何かはせむ……………三三
 何事か候ふべき……………五八二
 何事にかあらむ……………五八
 名にこそ負へれ……………五三
 何の入道とかや……………一七
 何となき……………八三
 何と無く……………三七三
 何とも候へ……………三三三
 何の興ありてか……………一六三
 なほ……………四二、八九
 なほ勝りたる……………一九
 ナホレオン……………三〇四
 なまめかし……………四九
 なまめきたる……………四三
 なみなみにはあらず……………二八六
 奈良法師……………二四四
 習ひ……………二
 習ひならば……………三三
 雙岡……………一五二

[に]

那蘭陀寺……………四六
 なりたるが……………三六
 なりひきこ……………五
 なる儘に……………一
 馴れたる……………六七
 南華の篇……………四一
 難無し……………二九二
 賑はしき……………五九五
 にげなき……………五九五
 似候ひなむ上は……………三三八
 仁壽殿……………四
 西塞り……………二五
 入宋……………四八
 二の舞……………一三三
 俄にしもあらぬ句……………二八〇
 庭に散りしをれたる……………二二
 花……………二二
 勾……………二六、六
 女房……………二七
 如幻……………五九七

[ぬ]

女孺……………五〇一
 によび……………四四五
 によび伏したる……………二四六
 如輪上人……………六六
 女院……………四一四
 女院……………五二
 人我の相……………二九三
 人間常住の思ひ……………五三
 人間の種ならぬ……………四
 人数立て……………六五
 任大臣の節會……………二七
 仁和寺……………一四三

[の]

願はしかるべき事こそ……………三
 多かめれ……………二四九
 猫また……………三六三
 れちけたり……………三七〇
 れち寄り……………五四五
 涅槃會……………三三三
 眠りて……………二〇五
 れんごろに……………一五
 念佛……………五七四
 念々……………二〇八
 念々の間……………二〇八
 能……………一五〇
 能ある……………三〇一
 軒たけばかり……………四二
 のく……………三三〇
 残無く……………三三〇
 残る松さへ嶺に淋し……………四
 き……………四
 荷前の使……………五
 後の葵……………三七八

[は]

後の業……………八八
 のどけしや……………三
 のしりて……………六
 野宮……………六
 のぼせて……………三〇一
 飲みけるを見て……………五二
 野ら……………七二
 のりあひ……………四七
 野分……………五五
 ノワリス……………三二九

庖丁者……………五四
 はえ……………四八
 博士……………四二
 はか／＼しき人……………三三
 はかり……………三九
 はかりて……………四九
 はかる……………四三
 白氏文集……………四〇
 はくち……………三〇
 運びて……………二九七
 箱風情の物……………一五二
 箱のくりかた……………二六五
 橋本やなほ水の近けれ……………一九〇
 ば……………八四
 芭蕉の涙……………二五〇
 はた……………一八四
 はたをつきて……………五八
 八幡……………二五五
 恥かしからぬかは……………五八
 八災……………二八六
 はづれ……………八八
 果の日……………一九
 花園左大臣……………一五
 花橋……………一五
 放ちて……………一九五
 鼻の程をこめきて……………二〇三

はなひたる時……………三三
 鼻をあはす……………三二
 禪る事ある頃にて……………二七九
 法……………二六六
 法印……………三〇
 法金剛院……………四六
 道ふ……………二五二
 はふれにたれど……………五
 法曹……………五二〇
 法成寺……………七三
 法成就の池……………四六〇
 法然上人……………二二四
 『法樂の夜』……………一九一
 侍りけるとかや……………二
 法燈……………一七
 濱床……………五三
 は矢……………二五七
 はやく……………三九
 腹悪しき人……………二九
 腹悪しく……………二八八
 復ふくるゝわざ……………五五
 春秋を知らぬ……………三
 遙なる……………三五、二六
 遙なる程なり……………二四
 春のいそぎ……………五七
 春のけしき……………五

[ひ]

春の行くへ知らぬも……………三七
 腫れまどひて……………一三
 番……………五七
 盤渉調……………五三
 火打羽……………一八七
 火かゞげよ……………六五
 日影……………五
 ひがごと……………三九二
 東三篠殿……………四四
 東山……………一九
 ひが／＼し……………九五
 非家の人……………四七〇
 疋……………一七六
 ひき入る……………五五
 微牛……………五三
 引きかへ……………六〇
 引返して……………一九〇
 ひきしたゝめ……………八八
 引きしるひて……………四三
 引きつくるふ……………二九三

| | |
|------------|--------|
| 比丘 | 二八九 |
| 比丘尼 | 二八九 |
| 日暮れ道遠し | 三〇六 |
| 秘藏 | 三〇五 |
| 秘藏の事 | 三〇九 |
| 膝突 | 三七八 |
| ひし | 一三五 |
| 非時 | 一七七 |
| ひし／＼と | 一七五 |
| 非修非學の男 | 一九〇 |
| 聖 | 一三六 |
| ひじり法師 | 一三五 |
| ひじり目 | 四三七 |
| ひた切り | 四四五 |
| 直垂 | 五三九 |
| 額髪 | 四四六 |
| ひたぶる | 四七 |
| ひたぶるに | 五九五 |
| ひたぶるの世捨人 | 四 |
| 筆受 | 二九六 |
| 悲田院 | 三八七 |
| 人くふ | 四六二 |
| 人氣 | 五七三 |
| ひとへに | 三六八 |
| 人には木の端のやう | 五 |
| に | 四六 |
| 一庭に | 四六 |
| 人に見ゆべきにあら | 一七 |
| す | 一七 |
| 枇杷皇太后宮 | 三八〇 |
| 人の上をのみ計りて | 三五七 |
| 人の仰せられしこそ | 六二 |
| 人のがり | 九 |
| 人の鏡 | 九 |
| 人の口にある歌 | 一九二 |
| 人の心はおろかなるも | 二六 |
| の哉 | 二六 |
| 人の心の花 | 六八 |
| 人の是非 | 四二四 |
| 人の費をなさむ | 一六三 |
| 人の程 | 一七 |
| 人の智恵を失ひ | 四九 |
| 人は天地の靈 | 五三 |
| 等しかるべし | 二五六 |
| ひとり燈の下に | 四一 |
| 晝御座の御氣 | 四七七 |
| 琵琶法師 | 五八 |
| 響きて堪へ難かりけれ | 一四六 |
| ば | 一四六 |
| 隙白くなれば | 二八二 |
| ひもの木 | 五八八 |
| 評定 | 五三 |
| 兵仗の家 | 五〇〇 |
| 兵仗の難 | 三九九 |
| 平調 | 五三 |
| 百日の鯉 | 五三 |
| 百薬の長 | 四四八 |
| 白蓮の交り | 二九九 |
| 平野 | 六九 |
| ひらばり | 四九 |
| ひらめて | 一四六 |
| 平緒 | 八一 |
| 便悪し | 五八七 |
| 髪そけす | 三二 |
| 不堪 | 三九九 |
| 吹きすさびたる | 二六 |
| 奉行の入道 | 五八四 |
| 文車 | 二〇一 |
| ふしはかせ | 五八〇 |
| 府生殿 | 五九六 |
| 鳥鐘調 | 五四二 |
| ふすぶる | 五 |
| 臥猪の床 | 四三 |
| 不整の趣味 | 三三 |
| 浮説 | 四三四 |
| ふたつもし | 一八二 |
| 二棟の御所 | 一八八 |
| ふためき合へる | 四三 |
| 藤原定家 | 三八五 |
| 藤原長能 | 三四七 |
| 藤原良房 | 二〇 |
| 藤村作君の演説 | 一一 |
| 不定 | 一五 |
| ふつゝかに | 一六 |
| 武帝 | 二五六 |
| 筆にまかせつゝ | 六〇 |
| ふと | 二五〇 |
| 舟岡 | 三七五 |
| 踏まする枝 | 一八七 |
| 文 | 六四、二〇〇 |

| | |
|------------|-----|
| 書明かにして | 三三八 |
| 書にも | 一四七 |
| 文の箱 | 二六五 |
| 踏み分けて | 三五 |
| 冬枯 | 五 |
| 降り埋みて | 九〇 |
| 振舞ひて参る | 一八七 |
| ふるまふ | 五八五 |
| 文永 | 五六一 |
| 分別みだりに起りて | 二二四 |
| 文保 | 二四一 |
| 辨乳母 | 三六〇 |
| 便利 | 二九八 |
| 程につけつゝ | 五 |
| 譽はまた毀りものとな | 一三 |
| 堀川殿 | 五三九 |
| 堀川内大臣 | 二九一 |
| 堀にてありければ | 一三〇 |
| 堀川相國 | 二七四 |
| 堀川大納言殿 | 五八一 |
| 堀河院の百首 | 七九 |
| 惚れたる顔 | 四五一 |
| 惚れて忘れたる事 | 二五 |
| ぼろ | 三四 |
| ぼろ／＼ | 三四 |
| 本縁 | 五三四 |
| 本歌 | 五八二 |
| 本草 | 三六六 |
| 本寺 | 五三九 |
| 本寺本山 | 四二五 |
| 本性 | 七 |
| 煩惱 | 一一〇 |
| 本文 | 五〇四 |
| 申しむつひけり | 二四三 |
| 安心迷亂 | 五九七 |
| 摩訶止觀 | 二二五 |
| まかせられむ | 一四二 |
| まがり | 二七六 |
| まがる | 五二八 |
| 紛るゝ方無く | 二二三 |
| 負けわざ | 五八五 |
| まことしき文の道 | 八 |
| まことの人ば智に無く | 一一 |
| 徳も無く | 一一 |
| まことや | 三 |
| 雅房大納言 | 三四一 |
| まさな事 | 四三 |
| 又五郎男 | 二七七 |
| 待ち出でたるが | 三六九 |
| 待ちつけぬべし | 三七五 |
| 松 | 六〇 |
| 松蔭顯性房 | 二七一 |
| 侍つことも無く | 一七 |
| 松下禪尼 | 四六二 |
| まつども | 五八 |
| 松尾 | 七〇 |
| まつはれ | 三〇六 |
| 祭 | 五四 |
| 萬里小路殿 | 五一 |

〔へ〕

| | |
|----------|-----|
| 經上りて | 二四九 |
| 平家物語 | 五七 |
| 兵盡き | 二三五 |
| 別當 | 四三 |
| 別殿 | 四六 |
| へなたり | 一〇一 |
| 變化 | 二〇九 |
| 遍照寺 | 四二 |
| 邊土 | 五四 |
| ほいなく思はせて | 三四八 |
| 本意なけれ | 一六〇 |
| ほかげ | 四八 |
| 外の色ならねば | 二七 |
| 外のそしり | 三七七 |
| 墨子 | 九 |
| 牧馬 | 一四 |
| 北山抄 | 一四 |
| 北面 | 三九七 |
| 反古 | 六 |
| 細き誓さし出だし | 四三 |
| 菩提 | 一六四 |
| ぼだし | 六二 |
| 法華堂 | 七 |
| 法顯傳 | 四九 |
| 法顯三藏 | 三三五 |
| 程 | 三六二 |
| 程無ければ | 二八一 |
| 〔ま〕 | |

まとし……………一〇七
 惑ひて……………一〇五
 惑の上に酔へり……………二二五
 間拔き……………三七五
 まばゆからず……………四〇六
 まばゆかりぬべし……………五九五
 前板……………三三二
 マホメツト……………三三七
 まゝこ立て……………三七五
 迷があるじとして……………二九四
 丸く……………一〇〇
 参るやうあらじ……………四六二

[み]

みかきが原……………五九五
 御溝……………五〇三
 みかま木……………四五五
 みぎは……………五
 汀の草に紅葉の散りと……………六〇
 御國讓の節會……………八〇
 見苦しとて人に書かす……………八〇

る……………一〇三
 みけしき……………三四二
 御けしき悪しくなり……………三二二
 て……………三七一
 見事……………四三〇
 みさかな何……………四三〇
 見様……………一七〇
 御鈴……………一七〇
 御隨身……………三九七
 御堂殿……………七
 御手洗に影のうつりけ……………一〇〇
 る所……………一〇〇
 通憲入道……………五五三
 道を行ぜむと……………一三五
 三つ足なる角の上に……………一四六
 自ら卑しき……………一〇八
 自らもいみじ……………一〇八
 光親卿……………一三三
 見つき……………一三五
 皆……………二九
 蟻……………四八
 六月被……………四八
 みなむすび……………四八
 源光行……………五五
 見ならはず……………三三
 醜き姿を待ち得て……………三三

身の後には金をして……………二〇七
 明雲座主……………三九八
 冥加……………六三
 明禪法印……………六八
 名聞苦しく……………六
 名利の要……………二一
 明巖和尚……………三三
 宮仕に立ち居……………三三
 ミル……………二〇
 見る事のやうに……………一五
 ミレ……………四七
 未練の狐……………六三
 三輪……………七〇
 身を助けて……………四三
 身を破るよりも……………三六

[む]

迎へずみたらむ……………五九五
 迎ふる氣……………四二一
 迎へに……………二四四
 むく犬……………四〇五
 無下……………一六三
 無慙……………三二五
 無常變易の界……………二五六
 むつかし……………三八
 むれ……………一五三
 むれとあらまほしから……………四七三
 む事……………四七三
 むれとする事は無く……………三六
 も……………一五五
 無用の用……………一五五
 紫の朱うばふ……………六六
 無量壽院……………七五

[め]

明月記……………三六六
 明治天皇の御製……………八六
 命ぜられて曰く……………五〇一
 妙觀……………五三

目さむる心地……………一〇
 目立つ……………二七
 めづらか……………三七
 珍らしき鳥……………三三
 めづらしく……………二八
 めでたからむこそ……………二七
 めなもみ……………二六
 目安かるべけれ……………三三

[も]

もだぐる時……………三六
 黙止……………四四
 もだし難き……………三〇六
 望月……………三六九
 最も愚にて……………一九
 もてあつかひぐさに……………二七
 もてしづめたる……………二八〇
 もてなす……………三三三
 基俊大納言……………四三三
 求めず……………三七
 元良親王……………三五
 物うとく……………三九

物がら……………三九
 物くるゝ友……………三八
 物毎……………三
 物毎に言ひて……………三三
 物越にも知らるれ……………二七
 物とはなしに……………四
 物にも似ぬ……………八
 物のあはれ……………三三
 物のきら……………二八〇
 物騒がしからぬやう……………二七
 物し給ふとも……………一五
 ものふりて……………三
 物見るあり……………二八
 紅葉をたかむ人もが……………一五
 な……………三九
 桃尻……………三九
 母屋……………三〇
 もろ矢……………三三
 文字の法師……………四九
 文選のあはれなる巻……………四〇

楊子……………九
 陽唐の韻……………五八
 楊名介……………五三
 館……………一
 やがて……………二〇
 山がつ……………四
 柳生但馬守……………三三
 艶隠者……………三七
 養ひ君……………三三
 康綱……………二七
 安らか……………三、二四
 柳箱……………三九
 柳樽……………二七
 柳原……………三三
 矢はげ……………二五
 山里などに移ろひて……………八七
 山階左大臣殿……………二九
 病に臥しては漢の食……………三八
 山へのぼりしは……………一四
 や……………三一

[や]

やり水……………五
 やんことなき……………四
 ゆかしかりしかど……………一四
 靱……………五七
 行きかひて……………七一
 行房朝臣……………五五
 雪佛……………四六
 靱明神……………五〇
 行末難なくしたゝめま……………一七〇
 うけて……………一七〇
 ゆする……………四八九
 ゆとい……………一五
 結びて……………一三
 木綿……………六八
 夕の日に子孫を愛し……………三三
 て……………三三
 夕を待ち……………三三
 ゆし……………三三
 ゆし……………三三
 ゆし……………三三
 ゆし……………三三

[ゆ]

[よ]

故づきたる……………二六
 用意ある……………四八
 用意あるかと思れば……………四八
 用意無き……………四八
 癩疽……………五三
 横川……………五三
 良きは良く……………四七
 よき人……………一五
 よき程に……………二九
 よきやうなるればひ……………四七
 よく知らぬよしして……………二九
 よく知れるか……………二九
 夜寒……………五三
 吉田……………七〇
 吉田中納言……………四八
 よしなき事なり……………二九
 よしなきこと……………二九
 よしなきことといひて打
 も笑ひぬ……………四三
 吉平……………四三

吉水和尙……………一九〇
 よすか……………一六三
 よそほへ……………四三
 よその聞にしたがひ……………二四
 て……………二四
 世づかす……………六五
 夜なが過ぐるまで……………六五
 世馴れず……………三〇
 世にあらむ思出……………四七
 世にありわぶ……………五九
 世に恥かしき方……………三三
 世の式も……………四三
 世のしれ者かな……………一九
 世のためし……………三三
 世のはかなき事……………三七
 宵の間……………五九
 夜深く……………二八
 よぶこ鳥……………五九
 よやく……………二五
 よやく……………二五
 夜の設けせよ……………六七
 よろぼひ……………四七
 弱腰を取る事なれば……………一八
 世を貧らざらむぞ……………五〇
 夜の御殿……………六七

[ら]

廊……………二七
 らうがはし……………一五
 らうがはし……………三三
 老子の言……………四一
 らうたくして……………四八
 埒……………二八
 螺鈿……………三三
 響鐘調……………四三
 隆辨僧正……………五三
 六藝……………三六
 理即……………五三
 律逸……………四三
 律師……………四三
 律師……………三三

[り]

李部王の記……………三五
 諒闇の年……………八一
 良覺僧正……………三九
 梁塵秘抄……………四三
 兩の手に桃と櫻や……………三三
 呂……………五三
 凌雲の額……………三六
 ルーテル……………一四
 料の御牛飼……………三三
 連歌……………三三
 蓮府……………五八

[れ]

[る]

[ろ]

妻宿……………五九
 祿……………一八
 六時禮讃……………五九
 鹿茸……………四〇
 六時堂……………五五
 六塵……………二八
 六條故内府……………三六
 六波羅……………四七
 ロセツチ「閃光」……………一九
 露臺……………六
 六根淨にかなへる人……………一九

[わ]

ワイルド……………二六
 王儉……………三七
 黄鐘調……………四三

索引よりらりるれ

黄鐘調の最中……………四三
 王子猷……………三六
 横笛の圖……………五一
 往生十因……………三三
 厄弱……………五三
 往亡の日……………二八
 我が方……………一五
 和歌の四天王……………四三
 若楓……………三三
 我が俗にあらずして……………四三
 我が朝のものとも……………三三
 我が身にあたりて……………三三
 若やかなるして……………二八
 我が世の外になり行……………二八
 く……………二八
 和漢朗詠集……………二八
 わさざしたち……………三三
 分けこしはやまの……………五九
 和琴……………四九
 わざ……………一六
 わさ田……………五
 わざとならぬ……………九
 忘れ難きことなどいひ……………二八
 て……………二八
 渡邊の聖……………四三
 わたり……………四三

[る]

居かゝる……………五七
 違順……………五九
 位署……………八五
 居たるあたりに……………一九
 院……………八二
 尹大納言光忠入道……………三七
 院の御棧敷……………三三

[る]

[を]

衛士……………三三
 酔ひて興に入るあま……………三三
 り……………一四
 酔の中に夢をなす……………三三
 惠遠……………三九
 圓伊僧正……………三三
 厭離……………三三
 緒……………三三
 をかし……………三三
 をかしき事……………三三
 をかしくもさらしく……………三三
 くも……………三三
 岡本關白殿……………三三
 小栗風葉の句……………三三
 をがましく……………三三

| | |
|------------|-----|
| なさめけり | 三 |
| なさく | 三 |
| 教 | 一四七 |
| 男はよけれ | 九 |
| 小野道風 | 一四七 |
| 小野小町 | 四一 |
| 折にふれば | 三 |
| 折節 | 三 |
| 女にたやすからず思は | 一四 |
| むこそ | 一四 |
| 女の髪筋にてよれる | 三 |
| 女のほける足駄にて造 | 三 |
| れる笛 | 三〇 |

索引終

大正十三年十二月二十五日印刷
 大正十四年一月一日發行



定價金貳圓八拾錢

發行所

東京市神田區表神保町二丁目四番
 振替口座東京二六四四番
 大阪市東區博愛町五丁目一番
 振替口座大阪四七一

修文館

修文館

館館

| | |
|-----|--------------------------|
| 著者 | 沼波武夫 |
| 發行者 | 東京市神田區表神保町二番四 鈴木常次郎 |
| 發行者 | 大阪市東區博愛町五丁目五十六番地 鈴木常松 |
| 印刷者 | 東京市小石川區久堅町一〇八番地 上村新輔 |

文學士 高木 武著

最新 國文解釋の研究

尾崎 久 彌著

類聚 西行上人歌集新釋

文學士 高木 武著

新釋 增鏡

新釋 徒然草

新釋 三才物語

定價金 二圓八十錢
送料 十二錢

定價金 二圓八拾錢
送料 十錢

定價金 二圓五十錢
送料 十二錢

定價金 一圓三十錢
送料 十二錢

定價金 二圓
送料 四錢

529
185

終

